

望月町文化財調査報告第7集

# 新水

—長野県北佐久郡望月町新水A・B遺跡緊急発掘調査中間報告書—

1 9 8 1

東信土地改良事務所  
望月町教育委員会

## I 新水A・B遺跡緊急発掘調査の構成

1. 遺 跡 名 新水A遺跡、新水B遺跡  
2. 所 在 地 新水A遺跡 北佐久郡望月町大字春日字小屋場4323-1  
新水B遺跡 北佐久郡望月町大字春日字四ツ屋4197  
3. 発掘調査委託者 東信土地改良事務所  
4. 発掘調査受託者 望月町  
5. 調 査 主 体 望月町教育委員会  
6. 調 査 の 目 的 春日地区県営ほ場整備事業の施行に伴い本遺跡が消滅するため、事前に発掘調査を行い記録保存をはかる。  
7. 調 査 期 間 昭和55年7月7日～9月2日（現場調査）  
8. 調 査 方 法 A遺跡：3×3m、B遺跡：4×4mグリッドによる平面発掘調査法（A遺跡第1号住居址及びB遺跡はドットマップ方式）  
9. 調 査 面 積 A遺跡：850m<sup>2</sup>、B遺跡：1000m<sup>2</sup>  
10. 調 査 団 の 構 成
- |                 |   |          |
|-----------------|---|----------|
| 顧 問             | 森嶋 稔（上山田小学校教諭）  | 日本考古学協会員 |
| 調 査 団 長         | 福島邦男（望月町教育委員会学芸員）   | 日本考古学協会員 |
| 調 査 員           | 渡辺重義（渡辺考古民俗資料館）   | 長野県考古学会員 |
|                 | 西沢 浩（明治大学生）   | 長野県考古学会員 |
|                 | 桜井 泉（望月町春日）   | 長野県考古学会員 |
| 作 業 員           | 土屋由美枝、桜井卯作、吉沢弥太郎、大森英七、吉沢浩矣、土屋重雄、依田慎三、大沢礼市、伊藤叔夫、武重秀子、福島茂子、大塚米子、大沢信次、寺嶋亮祐、関嘉津武、大森一尾、小林次之助、比田井準市、小林花江、井手初子、加藤定雄、倉見渡、重田貞司、松本寛、井手あき江、平林さだ、吉沢節子、佐藤淳一、林泰彦、高橋美智雄、伊藤のり子、坂田和博、上野庚子、清水七五三子 |          |
| 協 力 者           | 黒岩忠男、西沢吉次郎、室伏朝子、永田純代、重田武士、武田武良（地主）<br>重田徳市（地主）、重田寅男、株式会社竹花組   |          |
| 文化財調査委員会        | 大沢洋三、岩下清海、鈴木高、小野沢甚之丞、桑沢俊雄、窪田俊朝、柳沢右三郎、桜井貞男   |          |
| 調 査 事 務 報 道 機 関 | （社会教育係）大森睦男（係長）、小林正利、上野早苗、小林辰男、福島邦男<br>朝日新聞社、読売新聞社、中部日本新聞社、信濃毎日新聞社、日本放送協会、信越放送、望月町公民館報、望月町有線放送  |          |



第1図 新水B遺跡調査風景

## II 調査に至るまでの経過

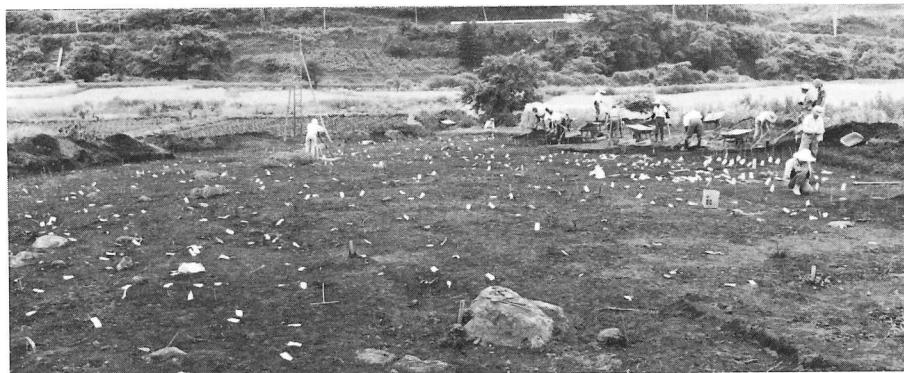
昭和54年4月に、望月地区（春日地区）県営ほ場整備事業の施行に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、長野県教育委員会文化課よりあり、調査の必要性を講じた。同年7月には、県文化課の丸山敞一郎氏、東信土地改良事務所、町建設係、文化財調査委員会、町教育委員会の参加の元に現地協議を行なった。その結果、平安時代の小規模な集落址の可能性があり、補助事業として発掘調査を実施することになった。その後、調査のための手続きや準備が進められ、翌年6月5日には、町教育委員会主催の発掘調査団会議が開催された。また、同日に、発掘調査参加者全員により、調査に関する説明会及び学習会が行なわれた。6月9日から6月20日までは、茂田井地区県営ほ場整備事業の施行に伴う又久保遺跡緊急発掘調査が行なわれ、引き続き、新水遺跡の桑の抜根、7月4日には調査員、作業員により桑株のかたづけ、次いで器材の搬入を行い7月7日には各関係者により結団式が行なわれ調査に入った。

## III 新水A・B遺跡の環境

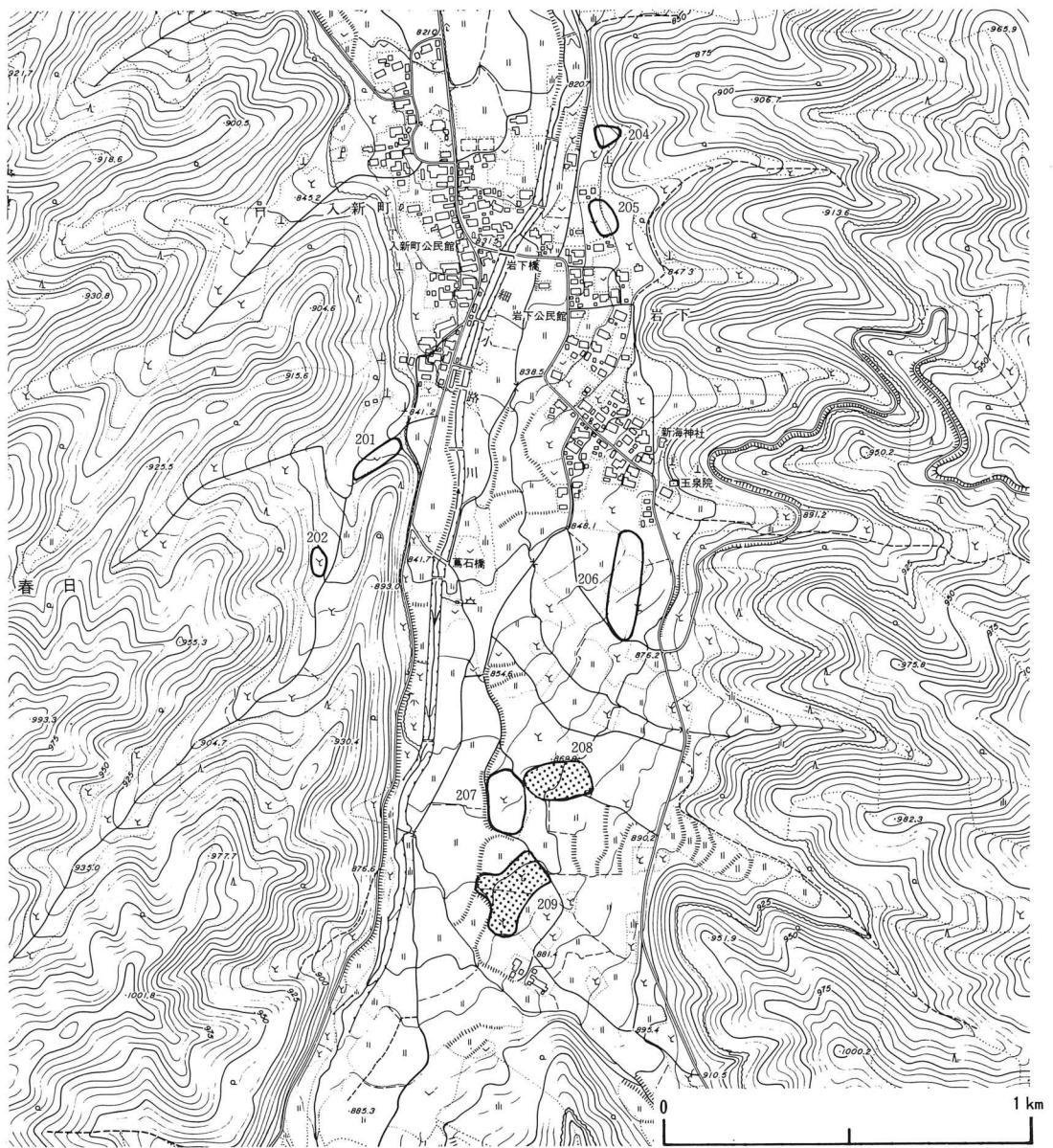
新水A・B遺跡（以下新水遺跡という。）は、主峯蓼科山（標高2530m）の北側麓に位置しているといえる。遺跡の西側には蓼科山の雨水を集めて流れる細小路川があり、住宅はこの付近で終っているため、汚れのないすんだ水をたたえており、イワナなどが比較的豊富に生息している。遺跡は、この細小路川に向って傾斜する西向の緩斜面上のややなだらかな段丘面にある。斜面上方には、水道に使用する程の豊かな湧水があり、A・B遺跡ともすぐ脇を流れ細小路川にそいでいる。

周辺地域には、新水A遺跡とB遺跡の中間に小屋場遺跡があり、同様繩文式時代と平安時代の遺物が散布している。これらの遺跡の北側には、前沖遺跡、続いて家浦遺跡、家中遺跡があり、細小路川を西側眼下に臨み、東から西への緩斜面の共通する立地条件を備えている。細小路川の左岸に至っては、牧寄A、牧寄Bの各遺跡があり、やや扇状地状の地形に立地する繩文式時代及び平安時代の遺跡である。

本地域は、水が豊富であることや山林が発達しており植物性食品及び動物性食品の豊かな地であり、生活立地としては極めて良好なところであったと想像される。



第2図 新水B遺跡調査風景



201 牧寄 A 遺跡, 202 牧寄 B 遺跡, 204 家中 遺跡, 205 家浦 遺跡

206 前沖 遺跡, 207 小屋場 遺跡, 208 新水 A 遺跡, 209 新水 B 遺跡

第3図 新水 A 遺跡・新水 B 遺跡位置図及び周辺分布図 (1 : 10,000)

## IV 調査日誌

7月7日 (月) 雨のち曇り

午前11時より、新水B遺跡調査現場において結団式を行う。その後、桑株のかたづけ、グリッドの設定(A遺跡: 3×3 m、B遺跡: 4×4 m)、グリッド掘りを行う。

7月8日 (火) 曇り

昨夜来の雨で、午前中は作業を中止した。午後グリッド掘りを行う。縄文時代早期田戸下層式が出土する。

7月9日 (水) 晴れ

グリッド掘りを行う。耕作土中より田戸下層式、田戸上層式、茅山式、梨久保式土器が出土する。また尖頭器も出土する。

7月10日 (木) 曇り

本日は、山形押型文、貝殻沈線文、条痕文土器など早期の土器と共に、石鎌、スクレイパー、打石斧、磨石、石匙、敲石、尖頭器などあらゆる石器が出土する。調査開始以来すでにほとんどの種類遺物が出土したといえる。

7月11日 (金) 雨

本日は朝から雨が降っていたので、調査員宿舎で遺物整理を行う。

7月12日 (土) 晴

相変わらず多量の遺物が出土する。縄文時代の遺物に加えて平安時代の土師器が出土する。

顧問の森嶋稔先生がおいでになり指導してくださいます。

7月13日 (日) 晴れ

耕作土から地山までかなり浅いので、グリッド掘りも容易に進んだ。地山の上に漸移層的なロームが耕作により浮き上っているので地山面の区別が少々難しい。遺物は、土器の少片や多量の石器が出土している。

7月14日 (月) 晴れ

B遺跡調査区の東側より、平安時代のカマドが検出された。その周辺部から土師器の壺と甕が多く出土する。

7月15日 (火) 晴れ

検出されたカマドに伴う住居址のプランがほぼ確認でき、第1号住居址とする。B遺跡全体から出土した遺物は、平板測量によりドットマップを作成する。本日作成したのは、第一段階のものである。これらの遺物を取り上げた後、再び掘り込みを行う。遺物集中区が幾ヶ所も現われる。

7月16日 (水) 曇り

本日より、B遺跡の進展具合をみながらA遺跡の調査に入る。グリッド掘りにより縄文早期土器と平安時代の土師器が僅に出土する。B遺跡では、遺物の平面測量を行う。本日まで1478番まで図中に記入した。

7月17日 (木) 晴

A遺跡で平安時代のカマドとほぼ完形の土師器杯がみつかる。B遺跡では、第1号住居址の掘り込みが開始された。床面が確認され、土師器の壺や甕の破片が多く出土する。

7月18日 (金) 曇りのち雨

本日は、午後から雨が降ったり止んだりのためあまり能率が上らなかった。B遺跡の遺構確認作業を行う。調査区北側の遺物集中区において、黒色の落ち込み(住居址)らしいものが確認される。遺物量は相変わらず多量である。第1号住居址の掘り込みを行う。

7月19日 (土) 曇り

B遺跡の第1号住居址では、遺物分布図と土層断面図をとり、覆土の掘り込みを行う。プラン西側部に土塙の切り合いを確認する。A遺跡で灰釉陶器が2個体出土する。

7月20日 (日) 晴れ

A遺跡では、グリッドの掘り込みを進める。昨日灰釉陶器が出土した地点でカマドらしい部分が見つかる。B遺跡では、第1号住居址の遺物分布図作成と清掃を行う。また、調査地域全体の遺物のドットマップを作成する。

7月21日 (月) 晴れ

B遺跡の第1号住居址の清掃と写真撮影を行う。住居址及び土塙の遺構確認作業も行う。土塙はすでに60基以上は確認されている。遺物集中区には、住居址らしきものが認められるが、プランがつかめない。

7月22日 (火) 晴れ

B遺跡全体の遺物ドットマップの作成と土塙の掘り込みを開始する。本日9基まで掘り進み、早期、中期と明らかに遺物によって判別できる。A遺跡では、グリッドの掘り込みを進める。

7月23日 (水)

B遺跡において、縄文式時代早期の住居址がほぼ確認される。トレンチによるものなので全体プランははつきりしない。相変らず遺物量が多い。土塙の掘り込みは続いており、かなり能率が上っている。A遺跡ではグリッド掘りを中心に行き進める。

7月24日 (木) 雨のち曇り

本日は、朝から雨が降り続いているので作業を中止する。一部の人で遺物洗いや整理を行う。NHK、信毎、読売、朝日の各報導機関が取材に来る。

7月25日 (金) 晴れ

A遺跡では、平安時代の焼失住居址が検出される。平面プラン確認の段階にあって、すでに全面が焼土に覆われていた。柱と思われる炭化材や土師器の大形破片が出土する。他の地点より片刃磨石斧が出土する。B遺跡では、遺物集中区の住居址範囲確認作業、土塙の掘り上げを行う。

7月26日 (土) 晴れ

A遺跡の焼失住居址は、第1号住居址とし、さらに、2号、3号住居址が確認される。切り合いの住居址で、カマドが2ヶ所に確認される。遺物量が多い。B遺跡では、土塙の半截作業がほぼ完了した。

7月27日 (日) 晴れ

B遺跡では、遺物集中区に2軒の住居址が確認され、第2号、第3号住居址とする。本日、掘り込みを開始する。2号住居址は、僅な中期初頭の土器が出土する。A遺跡では、第2号、第3号住居址のプラン確認と掘り込みを開始する。

7月28日 (月) 晴れ

A遺跡の第2号、第3号住居址の掘り込みをほぼ完了する。カマド付近からの遺物出土量が多い。B遺跡では、第2号住居址の掘り込みを進める。第3号住居址との切り合いがあるためプランがよくつかめない。切り合い部分からは、早期の遺物が多量に出土する。

7月29日 (火) 晴れ

A遺跡では、第4号住居址が確認される。B遺跡では、第2号、第3号住居址の掘り込み作業が進められ、全容がつかめかけてきた。相変らず遺物の出土量が多い。土塙の土層断面図をとる。調査地域東側を拡張するためテントの移動をする。

7月30日 (水) 曇り後雨

午前中は、雨が降ったり止んだりの天気であったが作業が進められた。午後は大雨となり中止した。A遺跡においては、土塙の確認と掘り込み、B遺跡では、土塙の土層断面図と第2、第3号住居址の掘り込

みを行う。

7月31日 (木) 晴れ

A遺跡では、第2号、第3号住居址の写真撮影と実測を行う。また、第1号焼失住居址の掘り込みを開始する。B遺跡では、中期初頭の梨久保式住居址が柱穴だけで確認される。

8月1日 (金) 曇り

朝から霧雨が降るあいにくの天気であったが午後からは良い天気になった。本日はお墓参りなので、調査員と学生だけで作業を進める。A・B両遺跡の土塹の土層断面をとる。B遺跡の第2、第3号住居址の遺物ドットマップをとる。

8月2日 (土) 晴れ

A・B両遺跡の土塹の掘り上げを行う。A遺跡第1号住居址の掘り上げと土塹の実測、B遺跡では、第3号住居址の掘り上げを行う。

8月3日 (日) 雨のち曇り

本日は、一日中雨が降ったり止んだりのぐづついた天気であったが、作業を続行した。A遺跡では、土塹の掘り込みと実測、B遺跡では、土塹の掘り込みと、第3号住居址の確認作業を行う。遺物量は多い。

8月4日 (月) 曇りのち雨

本日で一部の住居址を除いてほぼ掘り上げ作業は完了したので、作業員は一部の人を除いて今日で終り。台風10号の影響でぐづついた天気であった。A遺跡では土塹の写真撮影、B遺跡では、土塹の清掃、掘り上げを行う。調査地域南西側で、早期の第5号住居址が検出される。

8月5日 (火) 晴れ

本日は久しぶりの快晴であった。A遺跡では、遺構の写真撮影、B遺跡では、土塹及び遺跡全体の清掃土塹の実測、遺跡全体測量を行う。

8月6日 (水) 晴れ

B遺跡では、第5号住居址の掘り上げを行い、ほぼプランの全容が明らかとなった。住居址をとりまく柱穴も確認された。土塹の実測を引き続き行う。第3号住居址の掘り込みも行なわれる。

8月7日 (木) 晴れ

B遺跡において、第3号住居址の壁がほぼ確認され、プランの全容が明らかとなった。相変わらず多量の土器が出土している。遺物のドットマップを作成する。

8月8日 (金) 晴れ

B遺跡では、第5号住居址東側の炉址全容が確認された。後に平面実測と断面実測を行う。また、土塹の実測を行う。調査員と大学生、高校生での調査が続いている。

8月9日 (土) 晴れ

B遺跡では、土塹の実測と第3号住居址の掘り込み、第5号住居址の実測が行なわれた。連日の暑さが続いている。

8月10日 (日) 晴れ

B遺跡の土塹及びピットの実測はほぼ終了する。第3号住居址の遺物ドットマップの作成を行う。本日までの遺物番号は3315番までである。土塹は、早期と中期とに大きく区分することができ、内部に入り込んでいる石は、裏がえしすると石器であるものが多くみうけられる。

8月11日 (月) 晴れ

A遺跡では、残る土塹の実測を行う。B遺跡では、第2号住居址北側と第3号住居址北側で2基の屋外炉址が確認された。いづれもピット状落ち込みの中に焼けた石が入り込んでいるというもので、内部より少量の遺物が出土した。それぞれの住居址に伴うものと推定される。

8月12日 (火) 晴れ

A遺跡では、土塙の実測が完了し、焼失住居址の調査だけとなった。B遺跡では、第3号住居址南のA・Bロームマウンド、炉址、ロームマウンドにかかる早期の土塙の調査を残すだけとなった。

8月13日 (水) 晴れ

B遺跡では、ロームマウンドの範囲確認作業を行う。ロームマウンドの下に早期土塙がかかっており、土器や石器が多量に出土する。炉址の平面実測及び断面実測を行う。

8月14日 (木) 晴れ 作業休み

8月15日 (金) 晴れ 作業休み

8月16日 (土) 晴れ

A遺跡では、第1号焼失住居址の掘り込みを開始する。全面焼土で覆われ、遺物量も多い。土師器壺の墨書き器が出土する。柱と思われる炭化材があちらこちらに存在している。B遺跡では、ロームマウンドを中心とする周辺部の調査を行う。遺物量はかなり多い。

8月17日 (日) 晴れ

A遺跡第1号住居址の掘り込みは、焼土鬼面まで全体的に進んだ。相変わらず土師器の壺や甕の大形破片が出土する。B遺跡のロームマウンド周辺部の調査を行う。

8月18日 (月) 晴れ

A遺跡第1号住居址では、第1段階の写真撮影と実測が行なわれた。焼土がやや浮いていることに注意を払う。炭化材はかなり多量に出土している。B遺跡では、ロームマウンドと土塙にかけて土層観察用の掘り込みを行う。土塙内部にロームを投げ込んだ様子を示している。

8月19日 (火) 晴れ

A遺跡では、再度の掘り込みを行う。炭化材が形ちを残し多量に出土する。B遺跡では、第3号住居址を地山まで掘り込む作業を行う。柱穴及び土塙が検出される。ロームマウンドにかかる土塙の掘り込みを行う。

8月20日 (水) 雨

朝から小雨が降っていたが作業を行った。午後は大雨となり中止した。A遺跡では、焼土を取り除き炭化材を出す作業。B遺跡では、土塙の掘り込みが行なわれた。



第4図 実測風景

8月21日 (木) 曇り

A遺跡では、焼失住居址の掘り込みをほぼ終る。炭化材及び遺物が多量に出土する。B遺跡では、ロームマウンドと土塙の掘り込みを行う。土塙は二基切り合って存在していることがわかった。遺物量はあまり多くない。

8月22日 (金) 晴れ

A遺跡焼失住居址の掘り込みと清掃、写真撮影を行う。B遺跡では、土塙断面図をとる。Aロームマウンドのとり除きも本日行う。

8月23日 (土) 晴れ

A遺跡では、焼失住居址の炭化材と遺物を中心に実測を行う。その後、遺物の取り上げを行い、また、炭化材取り上げの準備をする。B遺跡では、取り除いたAロームマウンドの下に土塙が発見された。土塙表面からは多量の遺物が出土する。

8月24日 (日) 晴れ

B遺跡では、土塙の掘り込みを中心に行う。覆土は大部分がロームであり二次的に混入していることがわかる。規模はかなり大きい。

8月25日 (月) 晴れ

A遺跡では、炭化材の取り上げを行う。出土状態はかなり良好であったが、取り上げはかなり難しい。B遺跡では、土塙の掘り込みを続ける。今まで検出された土塙は、80基を越えている。

8月26日 (火) 晴れ

A遺跡焼失住居址の最終的な掘り込みはかなり進んだ。カマド西側で土塙状の浅い落ち込みが幾つも見つかり掘り始める。灰、焼土、炭が多量に混入し、遺物も多量に出土した。

B遺跡では、さらに土塙の切り合いがみつかり掘り始める。早期の遺物が多量に含まれている。

8月27日 (水) 晴れ

A遺跡の焼失住居址は、ほぼ掘り上がり全容が明らかとなった。再び墨書き器が出土する。遺物のドットマップを作成する。また、住居址の清掃、写真撮影を行う。B遺跡では、相変わらず土塙掘りを行う。

8月28日 (木) 晴れ

A遺跡焼失住居址の全体測量を行う。また、カマドの実測、断ち割りを行う。その後、カマドの復元をする。周辺にあった石はほとんどが当てはまり、ほぼ完全に復元できたと言ってよい。B遺跡では、土塙の掘り込みを行う。ほとんど掘り上げは終了状態に近い。

8月29日 (金) 晴れ

A遺跡、B遺跡共に全体測量を開始する。A遺跡は、焼失住居址の柱穴が新たに確認され掘り上げる。B遺跡では、土塙の掘り上げを全て完了する。

8月30日 (土) 曇り時々雨

本日でA・B両遺跡の全体測量を完了する。A遺跡では、柱穴により住居址が確認される。縄文式時代のものと思われるが詳しくは不明である。B遺跡では、図面と遺構の照合を行う。

8月31日 (日) 雨

朝から雨が降っていたが、現場にて取り残しのカマド断面の実測を行った。テント内の清掃も行う。

9月1日 (月) 晴れ

A遺跡、B遺跡の取り残しの実測、図面と遺構との照合を行ない本日で現場における全ての調査を完了した。

9月2日 (火) 晴れ

本日は、調査員宿舎にて図面照合、遺物の整理を行い事実上調査終了となった。

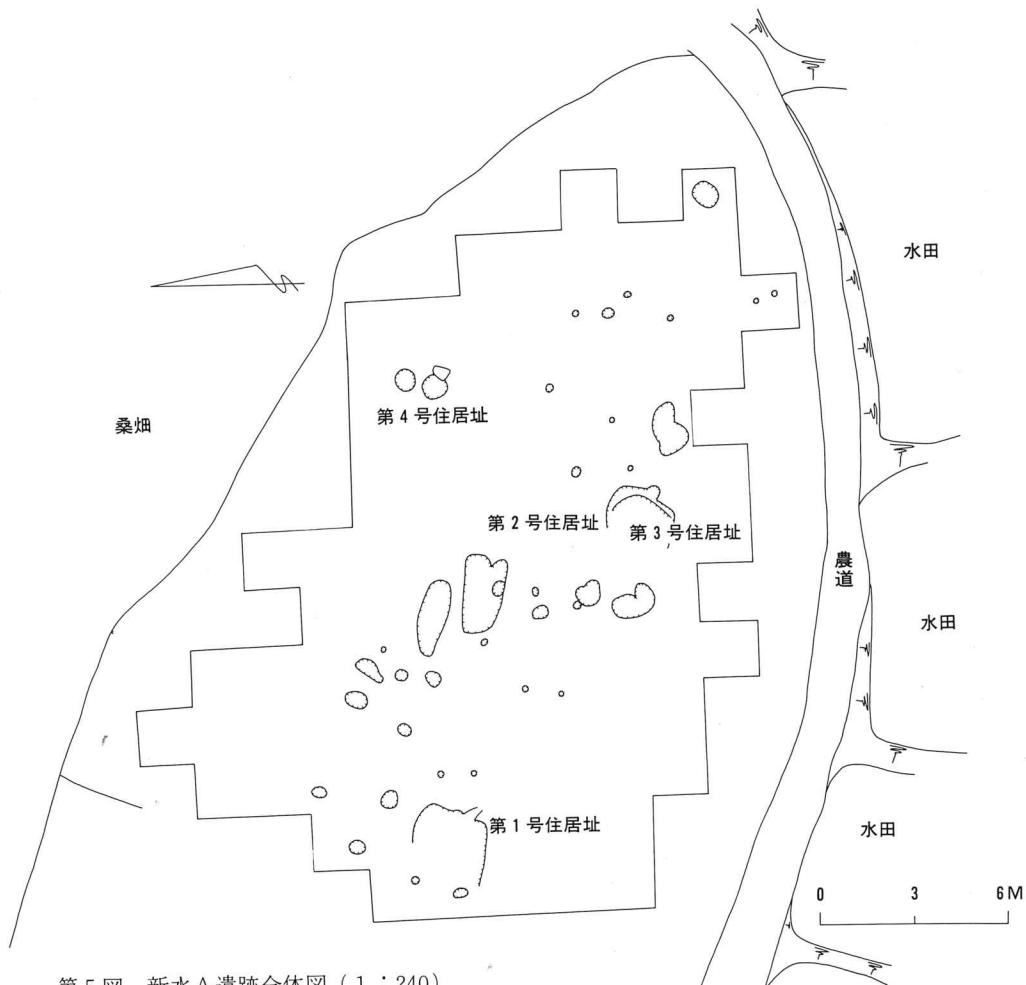
## V 新水A遺跡遺構及び遺物

### 1. 第1号住居址（第6・7図）

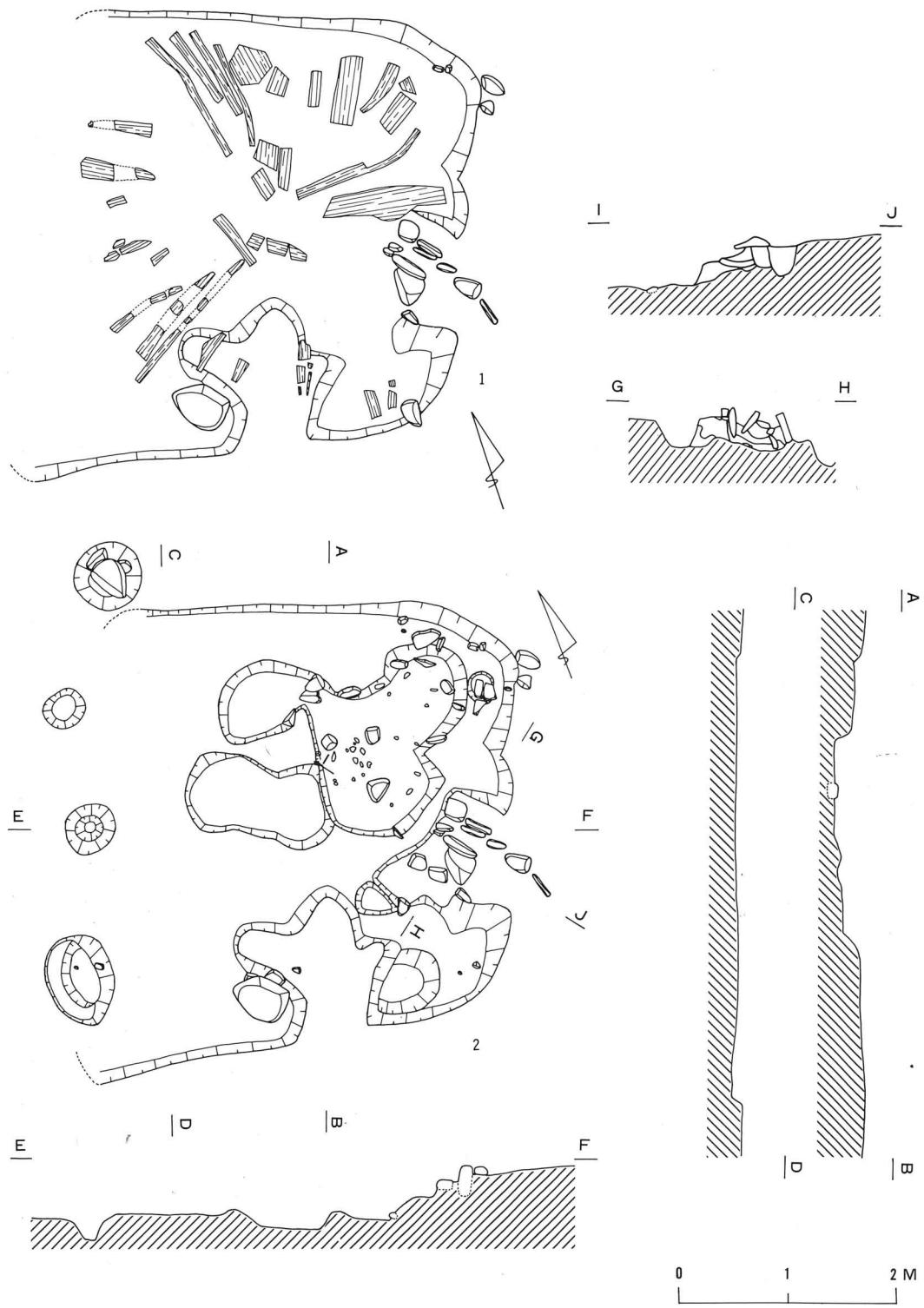
本址は、調査区西側斜面の低位な所で検出された平安時代の焼失住居址である。

本址の検出された所は、耕作土が最も浅いため住居址の西壁はすでに削り取られ確認することはできなかつたが、他の部分は良好な状態で検出することができた。

プランは、ほぼ隅丸方形の堅穴であり、東西400cm、南北400cm、壁高は東側が最も高く30cmで、平均15cmを測る。カマドは、東壁の中央部に位置し、長さ130cm、幅65cmを測り、やや崩れかかってはいるが石組みの大形のカマドである。粘土は全く使用していないと言って良く、両袖の石組みの基部を支えている程度である。竪口内部には、円柱状に支柱が残り、煙道は住居址東壁外に構築されている。煙道の方向はカマドと同一方向ではなくやや南側に曲って作られている。カマドの両脇と手前には、複雑に切り合った



第5図 新水A遺跡全体図 (1 : 240)



第6図 新水A遺跡第1号住居址実測図（1：60） 1.炭火物(材)出土状態 2.掘り上げの状態

浅い土塙が4基あり、小礫を敷き詰めたもの3基、礫の入らないもの1基である。覆土は、炭と焼土の混在したものが大部分であった。これらの土塙は、貯蔵用としてはほとんど考えられず、むしろ物を置くためのものであるかのように感じられる。しかし、住居址の全床面積に対する土塙の割合は、約3分の1も占めており、生活と土塙の関係のアンバランスを感じさせる。柱穴は、カマドのある東側壁面の両隅にも2個と西側の想定される壁面のほぼ中央付近に1個存在し、他は確認されなかった。西側の柱穴はやや変則的位置にあるといえる。

本址は、焼失住居址であり、プラン確認作業中からすでに厚く多量の焼土が覆っていた。特に壁に沿って集中していたことは注意をひく。炭化材は、かなりもろくなつてはいたが柱等の姿をとどめており比較的良好な状態で多量に検出することができた。炭化材の検出状況は、住居址の中央部から壁に向って放射状に存在しており、上屋がそのまま焼け落ちた状態を示している。また、四方の壁際には、壁に使用したと思われる薄い板のような炭化材が内側に倒れるように出土している。さらに屋根材と思われるカヤあるいはヨシの炭化物が固まって北東隅に出土している。

これら炭化材等の検出状況は、焼け落ちたとはいえ、比較的自然な崩壊状態を示しているといえる。当時の様子を伝えるものとして貴重である。



第7図 新水A遺跡第1号住居址遺物分布図（1：60）

## 2. 第2号住居址(第8図)

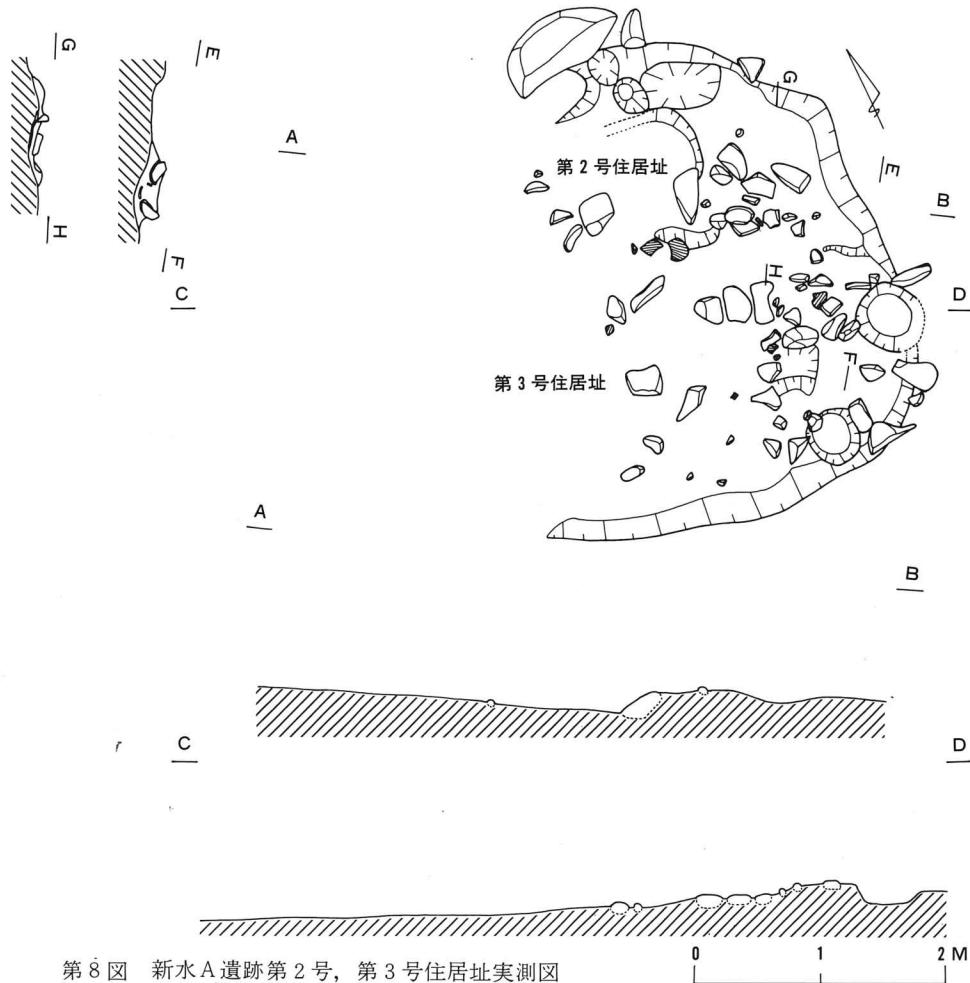
本址は、調査区斜面中央のやや南寄りで検出された平安時代の住居址である。大部分が第3号住居址と複合関係をもっており、時間的には、第3号住居址→第2号住居址の順になる。

本址は、検出状態があまり良くないため、明確にプランを把握することはできないが、南北は385cmを測る。壁は、カマド周辺部のみ残り、高さ25cmである。カマドは、かなり大きな礫を利用した大形の石組カマドで、粘土は全く使用していない。両側部分は比較的良好であるが、上部は落下し、周辺部に散乱している。床面は、固く締っているがかなり荒れており、全体に斜面に沿いながら傾斜している。柱穴は、確認することができなかった。

遺物は、土師器の壺・甕・灰釉陶器が出土している。

## 3. 第3号住居址(第8図)

本址は、前掲の第2号住居址と複合関係をもつ隅丸方形の堅穴住居址で、同様に調査区中央部のやや南



第8図 新水A遺跡第2号、第3号住居址実測図

寄りの所で検出された。第2号住居址に本址が切られているため、カマドを中心とする東側の壁面と両側のコーナー、東側壁面の周辺部の床面が僅かに残存するだけであり、他は全て存在していない。カマドは比較的良好で、第2号住居址と同様粘土を使用しない石組みで構築しており、主軸115cm、幅90cmを測る。10世紀末から11世紀初頭におけるこの地方の特色を示している。内部は、焼土がかなり厚く堆積しており長期間の使用を示すものである。塁口部の手前には、表面が平らな石を敷いてあり、カマド、とりわけ塁口部との関係をみせている。

遺物は、土師器の壺・甕がカマド内部及び周辺部より出土している。

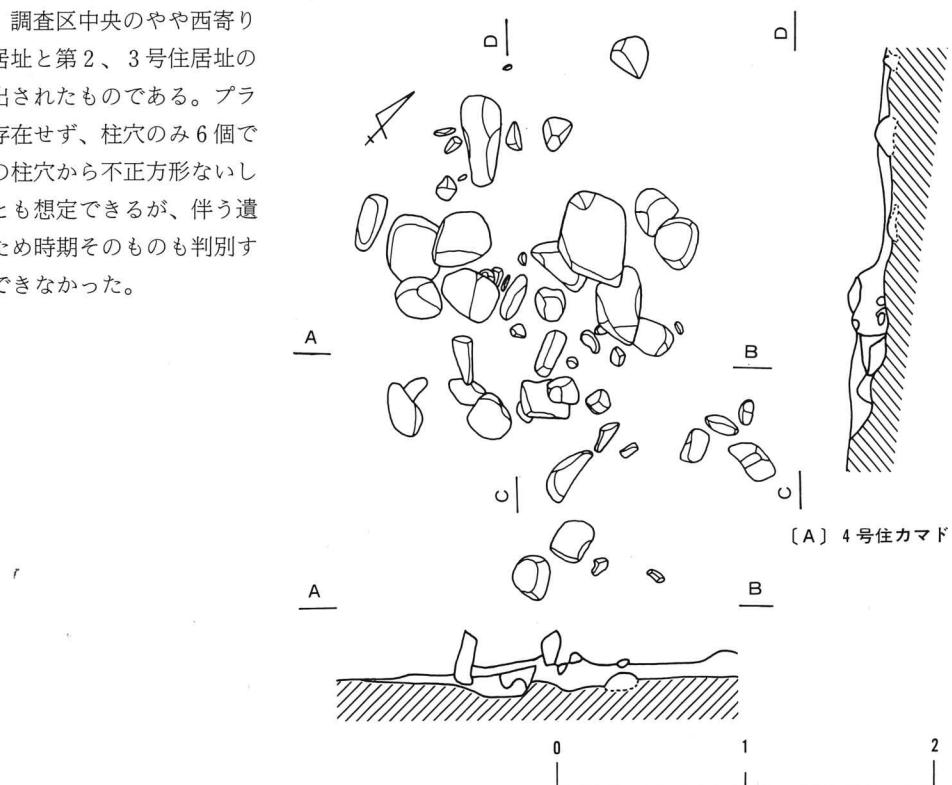
#### 4. 第4号住居址（第9図）

調査区の北東部で検出された住居址であるが、すでに耕作によりプラン全体が破壊され、カマドだけが残存しているものである。このカマドは、本遺跡では最も大きなものであり、主軸を東南東に向け、ほとんどが大礫により構築されていた。本遺跡から検出したカマドと同様粘土は全く使用されておらず、大礫のすき間には小礫を補うなどしている。奥行き200cm、幅100cm、カマド上部より底面まで20cmを測る。内部には少量の焼土が堆積していただけで、石も焼けておらず長期の使用は考えられない。

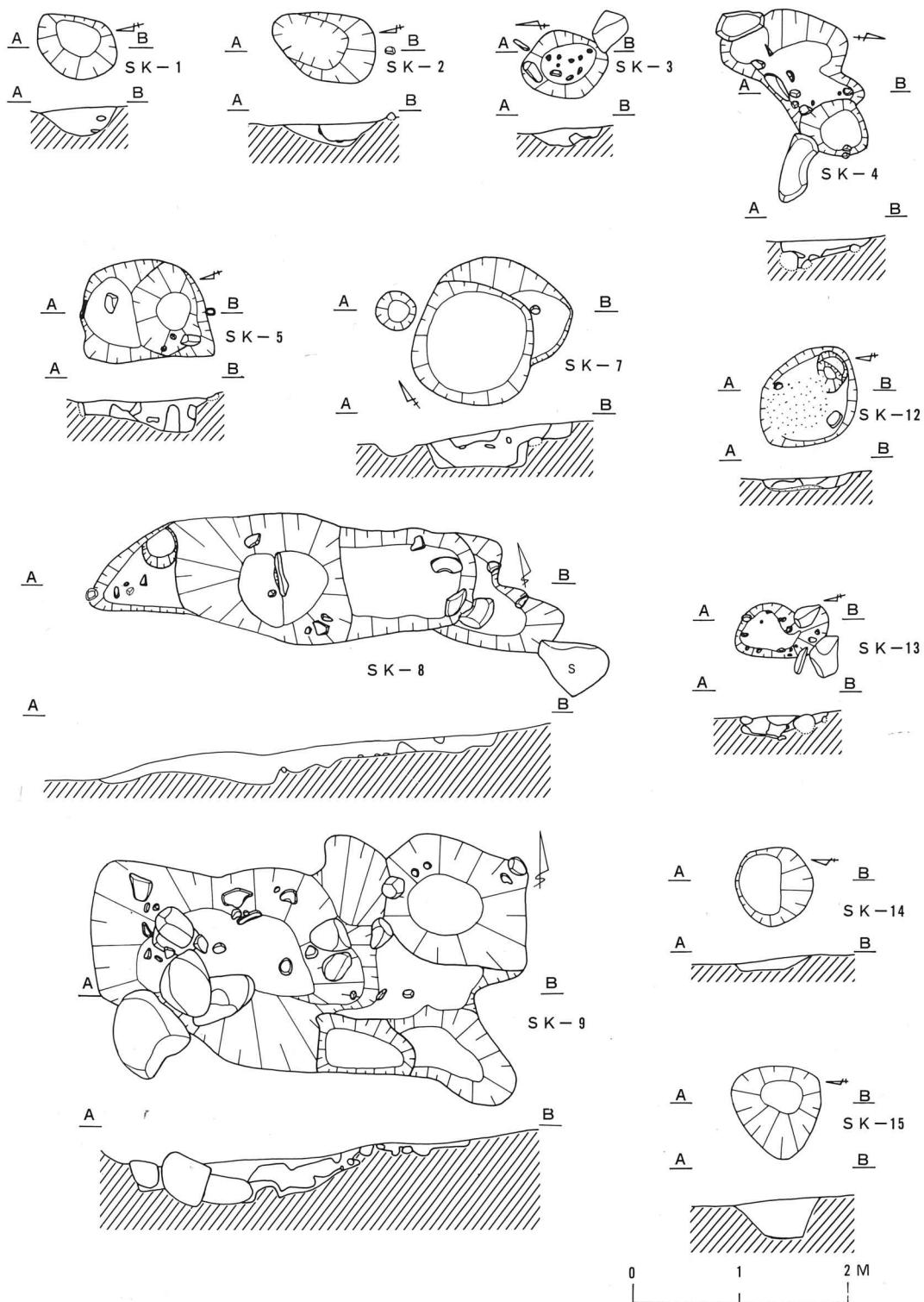
遺物は、カマド内部より土師器の壺と甕が出土している。

#### 5. 第5号住居址

本址は、調査区中央のやや西寄り第1号住居址と第2、3号住居址の中間で検出されたものである。プランは全く存在せず、柱穴のみ6個である。この柱穴から不正方形ないしは楕円形とも想定できるが、伴う遺物が無いため時期そのものも判別することができなかった。



第9図 新水A遺跡第4号住居炉址（1：40）



第10図 新水A遺跡土塙実測図 (1 : 60)

## 6. 土 坂（第10図）

A遺跡から検出された土坂は合計23基を数え、そのうちの1基（第22号土坂）が縄文式時代早期の条痕文系土器を伴うものであり、他は平安時代の遺物を伴うものそして無遺物の土坂も数基存在していた。

第22号土坂は、第1号焼失住居址の床面と複合関係を成して検出された。平面はほぼ円形を呈し、東西60cm、南北85cm、深さ20cmを測る。他の土坂は、平面が円形、橢円形、あるいは不定形の形状を示し、かなりバラエティーがある。また深さ等規模もさまざまである。

## VI 新水A遺跡総括

新水A遺跡は、春日岩下地籍の東から西へ傾斜する台地の先端付近に位置し、蓼科山を源流とする細小路川と台地東方から流れる豊かな湧水とに恵まれた絶好の環境にある。

検出された遺構は、平安時代の住居址4軒、時期不詳の住居址1軒、縄文式時代早期の土坂1基、平安時代及び時期不詳の土坂22基である。第1号住居址は、焼失住居址であり、当時の建築様式や生活様式を知る上で大変貴重な資料が得られている。特に炭火材は、ことごとく住居址の中央に向って倒れた状態で検出され、上屋の構造を知る上で重要な所見を与えている。また、主柱と支柱、あるいは壁材なども当時の様子を復元できる程良好な状態で検出された。屋根材と思われる、カヤあるいはヨシも蒸された状態で見つかっており、平安時代の家屋研究の上で重要な位置を占めるものと思われる。カマドは、住居址に伴い4基確認されており、いずれも大きな山石を使用した石組みが基本である。粘土は、石を支える程度に貼られているだけである。笠口部から煙道までかなり長く、また全体に規模が大きい。しかも、いずれも東向きに構築しているのが特徴である。住居址からの出土遺物は、第1号焼失住居址からは、「女」（もう1点は判読できない）と書かれた墨書き器が二点出土し、第2号住居址からは、灰釉陶器の豪華品が出土している。これら以外に土師器を中心とした遺物が多量に出土している。新水A遺跡の住居址は、総体的に10世紀末から11世紀初頭に位置づけることができる。

平安時代の遺物の他に、縄文式時代早期の土器も比較的出土しており、第22号土坂が早期のものであることをみれば、住居址が存在していた可能性がある。

土坂は、形態的にかなりバラエティーがあり用途等捉えることはできなかった。また、無遺物の土坂もあり、住居址分布範囲に包括されているとはいえない、散在的な在り方を示している。

本遺跡の立地条件は、むしろ縄文時代的であり、沖積地帯はかなり下流に存在する。今でこそ水田が営なまれているが、かなり限定された地域に立地を求めていたといえる。 （以上福島邦男）



第11図 調査風景



第12図

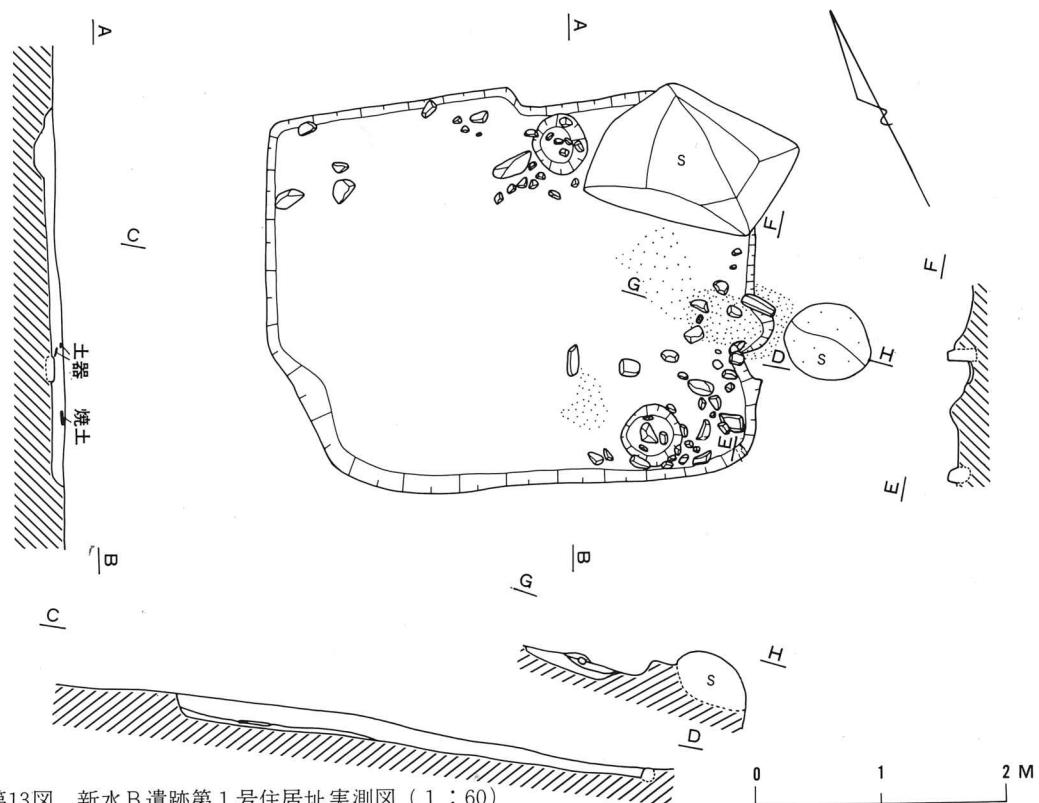
## 1. 第1号住居址（第13図）

本址は、調査区東端の中央部より検出された平安時代の住居址である。プランは、やや東西に長い隅丸長方形を呈しており、東西390cm、南北320cm、壁高はかなり低く7~10cmを測る。西側の一部は、縄文時代早期の土塙と複合関係を成しており、本址は、土塙上に貼り床を行っている。床面は全体に固く締っており、焼土や灰が広範に散布していた。カマドは、東壁面のほぼ中央部にあり、奥行き50cm、幅60cmを測る幅の広い小規模な石組みで、両脇は粘土で覆うように構築してある。カマド内部及び窓口周辺部には焼土、炭、灰が厚く散分している。柱穴は、カマドのある東側両隅に検出できただけであった。

プランの北東隅には、巨大な石が存在しており、精査の結果からみると、プラン構築後に入り込んだものではなく、構築以前から存在していたものであり、むしろこの石を住居内に取り入れるように構築したのではないかと考えられる。石のあり方は、カマドの横の北東隅ということもあって、なにかしら神聖なもののように感じられる。

## 2. 第2号住居址（第14図）

本址は、第3号住居址と複合関係をもつ縄文式時代早期の堅穴住居址である。複合部は西側3分の1程度で、第2号住居址→第3号住居址と編年することができる。しかし、伴出遺物からすれば、全く同時期と言って良く、ほとんど時間的な差はないと思われる。プランは、東西400cm、南北450cmと想定でき、壁高は、高い所で5cm、低い所で1cmを測る。床面は、地山上に多量の小レキと、黒色土と黄色ローム混り

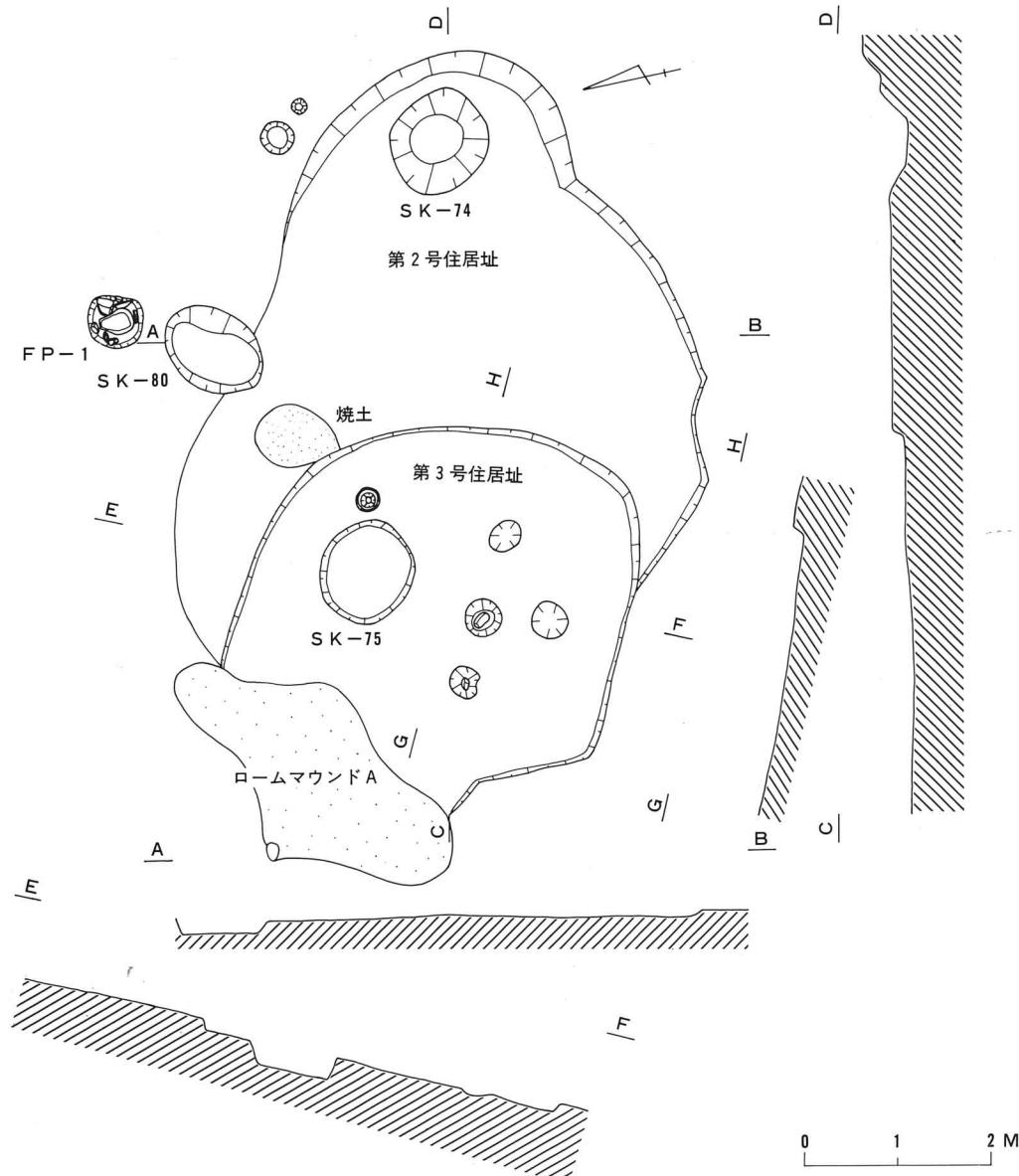


第13図 新水B遺跡第1号住居址実測図（1：60）

の土を入れて構築してあった。全体にほぼ水平に近いが、東から西への自然傾斜に沿ってやや傾斜する傾向がある。炉址は、屋外炉で、1号炉址もしくは3号炉址が該当すると考えられ、4号炉址も可能性がある。これらの炉址は、第3号住居址ともかかわり合いがあると思われる。

### 3. 第3号住居址（第14図）

本址は、調査区北側の中央部で検出された縄文式時代早期の堅穴住居址である。第2号住居址と第76、80号土塙との複合関係を成している。これらの切り合いの時間的関係は、土器型式からすれば、全く同時



第14図 新水B遺跡第2号、第3号住居址実測図（1：80）

期なため判別できないが、本址が最も新しいものである。時間的関係というよりもむしろ一定時期における新旧の順位といったものである。第2号住居址を掘り込み、土塹上には貼り床を成したものである。

プランは、やや楕円ぎみの隅丸を呈する方形で、東西400cm、南北400cm、壁高5~7cmを測る。比較的浅い壁であるが明瞭にプランを確認することができた。床面は、第2号住居址と同様に、地山上に黒色土と黄色ローム混りの土、それに小礫を敷き、固く締めてあった。やはり自然傾斜に沿ってやや傾斜しているが、特に低い部分に埋め土を行ない補正を成している。炉址は、第2号住居址のものと関連して第1号、3号、4号炉址のいづれかを使用したと考えられ、ともに屋外である。

遺物は、約1500点の出土量を数えバラエティーに富み多量である。

#### 4. 第4号住居址

本址は、調査区の北東部、第2号住居址の東側で検出された縄文式時代中期の住居址である。耕作等により壁及び床面がほとんど破壊され柱穴だけが残存していた。柱穴は、主柱穴5本が円形に配置され、建て替えた柱穴と考えられるものが、主柱穴に伴なって3本確認された。これらからプランを想定すると直径6mのほぼ円形になると思われる。本址は、同様中期の梨久保式土器を伴出する大形の土塹と複合関係があり、複雑な様相を呈している。切り合いの新旧関係は現状では把握することはできなかったが、住居址の方が古く位置するように感じられる。地山直上より梨久保式土器が出土していることや、周辺部からも同様の土器が出土していることから、梨久保式期の住居址ではないかとの所見に立つ。

#### 5. 第5号住居址（第15図）

本址は、調査区の最南西端で検出された縄文式時代早期の堅穴住居址である。細小路川河岸段丘の最も近い所にある。プランは、西側の壁面が破壊され存在しないが、他は良好である。東西380cm、南北320cm、壁高は東側が最も高く30cm、西側に至るに従って低くなり隅丸方形を呈している。床面は、やや凹凸があるが比較的平坦で固く締まっている。柱穴は、各コーナーに2個ないし1個づつ存在しており、規模はほぼ一定し直径30cm、深さ30cmを測る。各コーナーの2個づつの柱穴は、同時期に存在したものではなく、建て替えた結果であろうと考えられる。

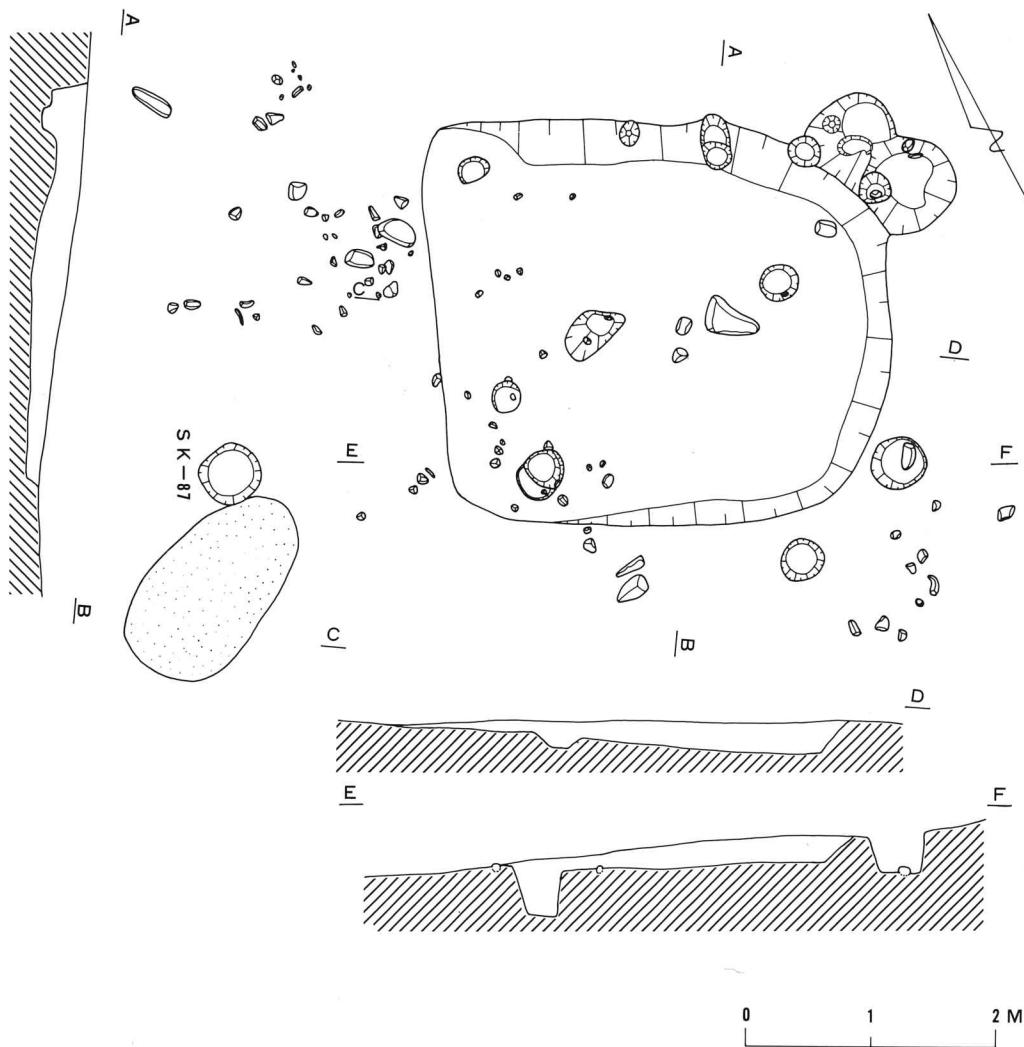
遺物は、楕円押型文と無文土器が出土している。

本址は、新水B遺跡の縄文式時代早期の住居址の中にあって、最も良好な状態であり、さらに県内の同時期の住居址の中にあってもかなり良好であり、標式ともなりうるものである。

#### 6. 第6号住居址

本址は、調査区北側の第1ロームマウンドの西縁を壁として構築されたもので、縄文式時代早期に比定されるものである。プランはほとんどが破壊されロームマウンドと接する部分だけが壁として残っていただけである。柱穴は、西南部に確認され、これらから東西400cm、南北400cmの方形プランになるかと思われる。床面は僅かに検出されただけであった。床面の下には、第76号土塹と第77号土塹が存在し複合関係を成している。

・本址から出土した遺物は、かなり多量である。



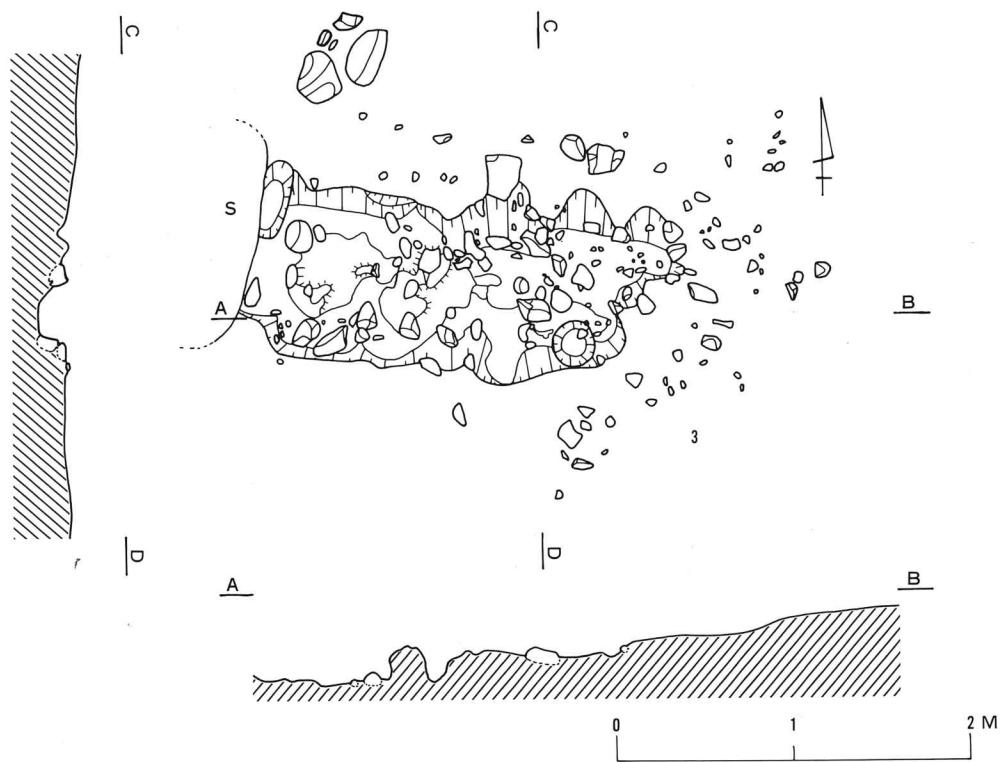
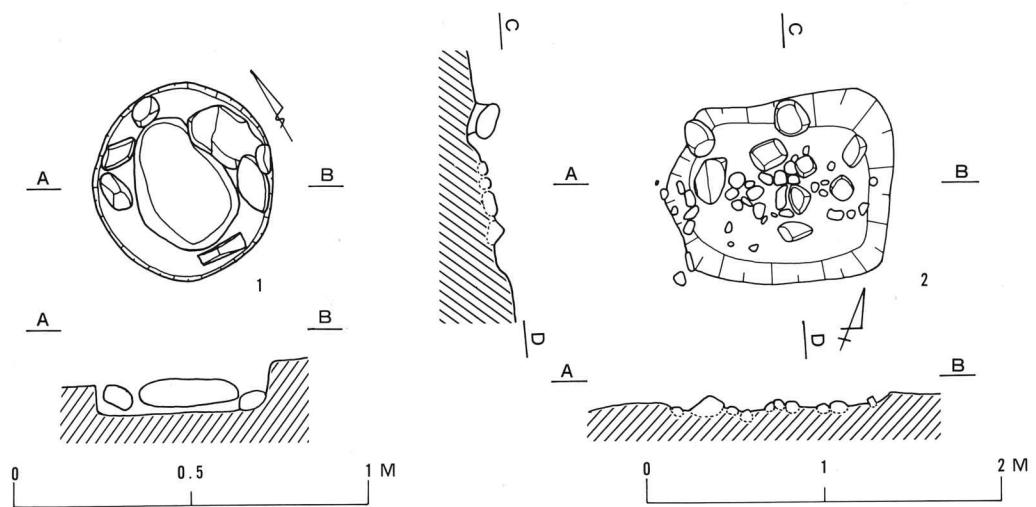
第15図 新水B遺跡第5号住居址実測図

## 7. 第1号炉址(第16図)

第1号炉址は、第2号住居址と第3号住居址のすぐ北側に位置しており、小規模ではあるが、本遺跡で検出された中では最もまとまっているものである。

プランは、平面がほぼ円形で東西105cm、南北117cm、深さ25cmを測る。内部には扁平な河原石を置き、その石の周りに拳大の石を数個配置してある。炉址内には、焼けた川砂が堆積し、茶褐色土も僅に入っていた。また炭も僅に混入していた。遺物は、縄文式早期土器が出土した。

本炉址は、第2号住居址か第3号住居址のいづれかに伴うものと考えられるが、現状では確認できなかった。また、第6号住居址に伴うことも考慮する必要があると思われる。



第16図 新水B遺跡繩文式早期炉址 1.(1:20) 2.3(1:40)

## 8. 第2号炉址(第16図)

本址は、調査区のほぼ中央部で検出された縄文式時代早期の炉址である。プランは、東西240cm、南北105cm、深さ20cmを測る長楕円の規模の大きなものである。内部には、拳大からやや大きな石までが焼けて多量に入り込んでおり、ほとんど全部が剥げ落ちる程の熱を受けていた。焼成場所は大きく二つに区分することができ、それぞれ円形に石を配している。遺物は、早期土器片と黒輝石片が出土している。

本址は、早期住居址群のほぼ中央に位置しており、いづれの住居址に伴うものかは判明できないが、位置あるいは規模からして共同の炉址であった可能性もある。

## 9. 第3号炉址(第16図)

本址は、第2号住居址と第3号住居址の南側に位置しており、縄文式時代早期の炉址である。プランは東西180cm、南北100cm、深さ15cmを測り、長方形に近い楕円形を示している。内部には、拳大の焼石が多量に入り込んでおり、もろく焼け崩れている。本遺跡で検出された炉址の中では最も深く、遺物の出土量も比較的多かった。

## 10. 第4号炉址

本址は、第3号住居址の北側に隣接して検出された縄文式時代早期の炉址である。プランは、東西80cm南北80cm、深さ12cmを測り、やや不定形な円形に近い形状を成している。全体にすり鉢状であり、焼土と焼け石が入り込んでいた。遺物は早期の土器と磨石、凹石が出土している。

## 11. 土 坂 (第17図・第18図)

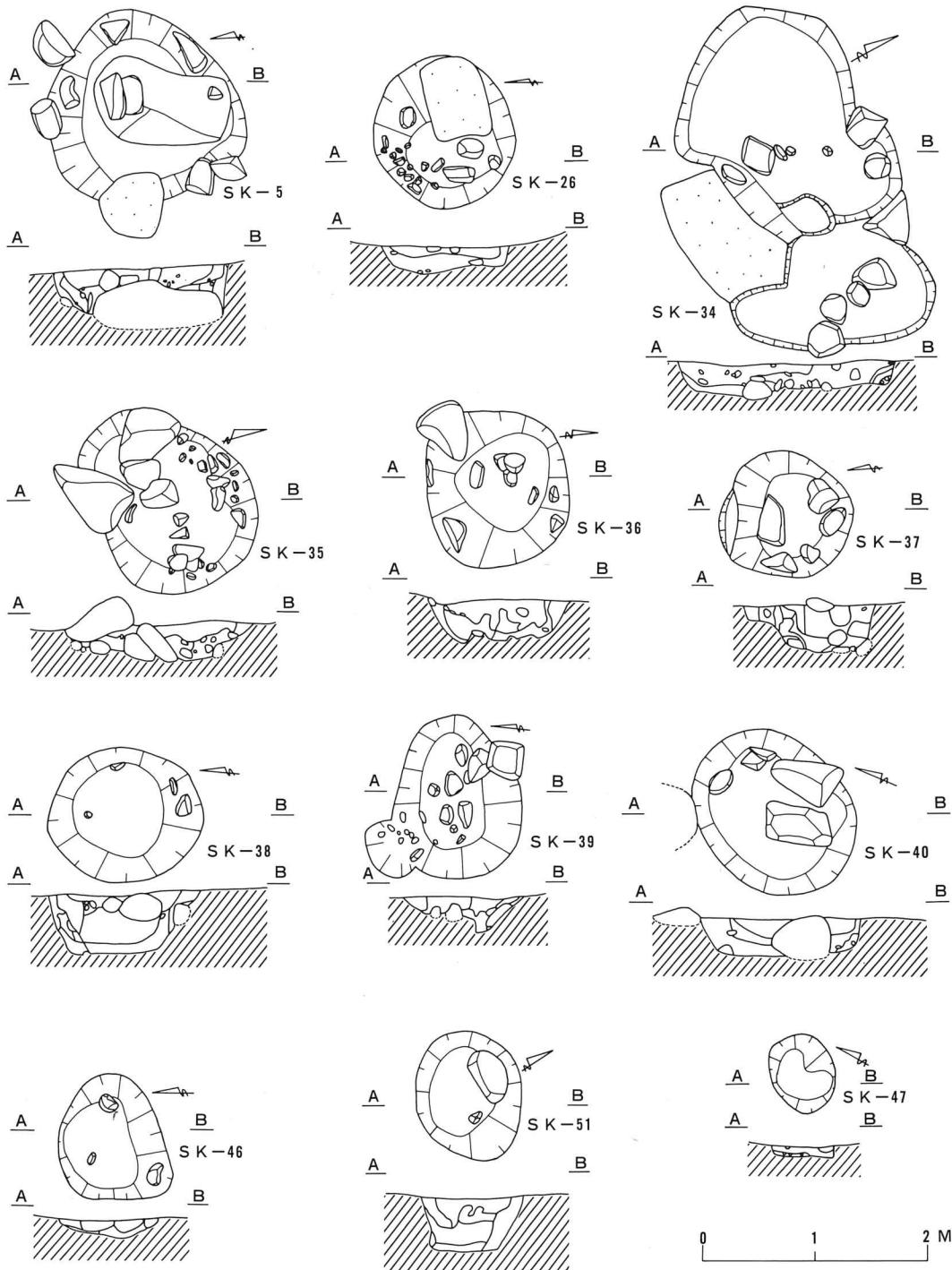
B遺跡より検出された土坂は合計83基あり、縄文式時代早期と中期に区分することができる。調査区の南東部と北西部には早期の土坂群が存在し、北東部には中期の土坂群が集中するという傾向がみられる。地形的に遺構配置状況をみると、調査区中央部より東側のややなだらかなところに中期土坂群が存在し、中央部より西側の緩傾斜地には早期土坂群が集中するという特徴をもっている。調査区をさらに北側へ拡大すれば、全体的傾向をさらに詳しく捉えることができると思われる。

### 早期の土坂

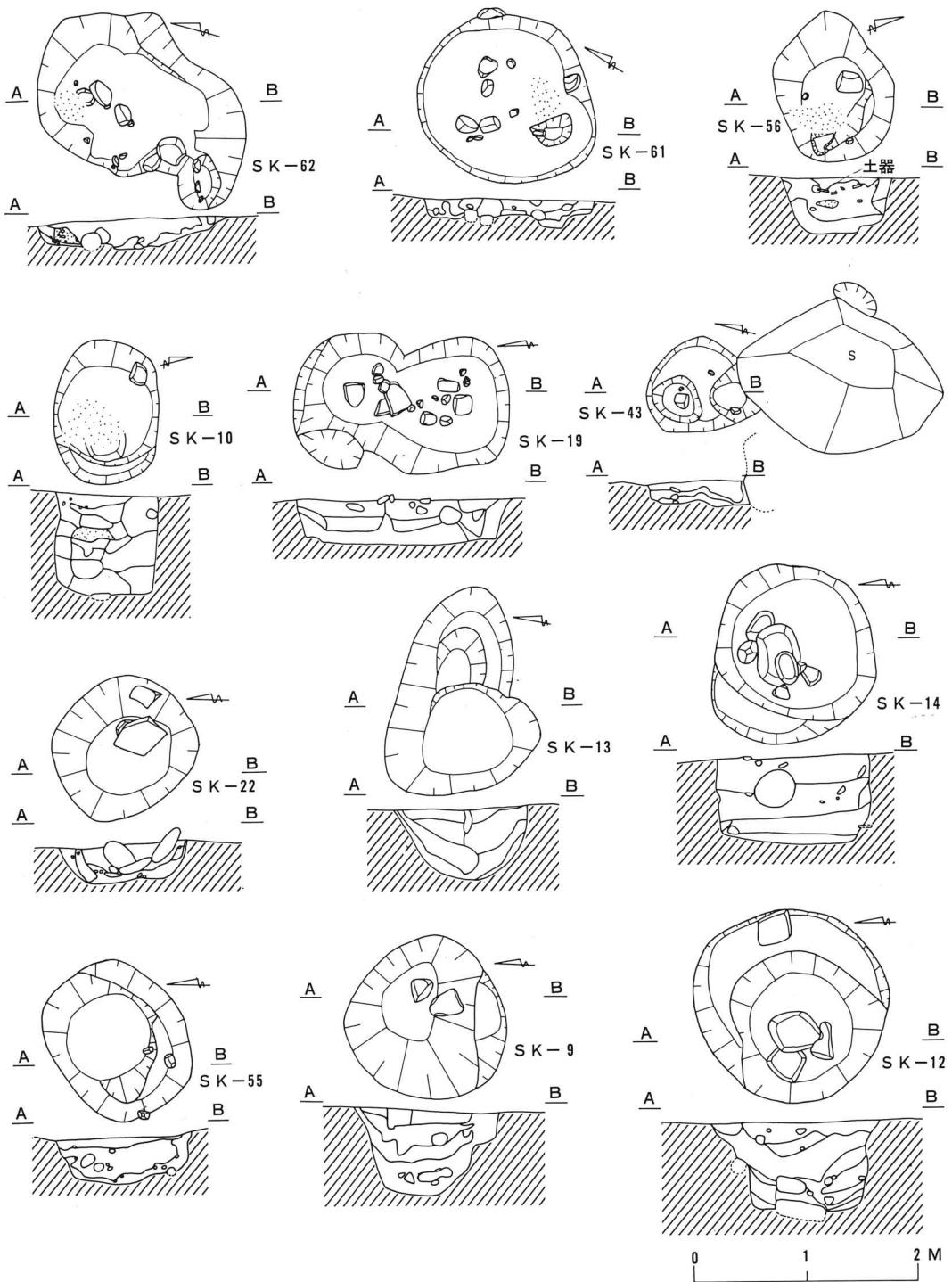
5、26、30、36、37、38、39、40、44、46、47、51、67、71、73、75、76、77、78、79、80、81、82、83号このうち、北東部土坂群の26、36、37、38、39、40、46、47号土坂は、小範囲の中に意図的に配列された様子をうかがわせている。遺物は極めて多量である。その他の土坂も多量の遺物が出土しており、山形押型文、楕円押型文、貝殻沈線文、貝殻条痕文の各土器がある。石器は、石鏃、磨石、凹石、敲石、特殊磨石、石皿など多数出土しており、中でも第44号土坂では、石皿と磨石が共に出土しており、セットであると言っても過言ではない。

### 中期の土坂

1、2、3、4、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、



第17図 新水B遺跡縄文式早期土坑実測図（1：60）



第18図 新水B遺跡縄文中期土塙実測図 (1 : 60)

25、27、28、29、31、32、33、34、35、41、42、43、45、48、49、50、52、53、54、55、56、57、58、59  
60、61、62、63、64、65、66、68、69、70、72、74

以上の59基が中期の土塙で、これらの中には、焼土がかなり厚く堆積しているものや、遺物が濃密に出土するものが何基か含まれている。比較的浅く、土塙内部がかなり焼けているものは、土器焼成場ではないかとの所見に立つ。遺物は、全ての土塙内部より多量に出土しており、大部分が梨久保式土器である。石器は、石鎌、凹石、磨石、黒輝石製の搔器、削器などが出土している。

早期及び中期の土塙の形態は、次のように分類することができる。

- A、平面が円形で底が平らなもの
- B、平面が円形で底部に向ってすり鉢状の形態をなすもの。
- C、平面が橢円形で底が平らなもの
- D、平面が橢円形で底部に向ってすり鉢状の形態をなすもの
- E、全体的に不定形なもの

本遺跡の土塙は、一定地域における立地、住居址との関係、あるいは土塙の形態の問題など非常に興味深い状況を示しているものといえる。

## VIII 新水B遺跡総括

B遺跡は、A遺跡との間に浅い沢を隔てた南側の台地上に位置している。この沢には、台地東方の湧水から豊富な水が流れしており、蓼科山を源流とする細小路川に流れ込んでいる。本遺跡は、東から西への緩傾斜地であり一日中日当りのよい絶好の立地条件である。

本遺跡からは、縄文式早期の住居址4軒、同中期の住居址1軒、平安時代の住居址1軒、縄文式早期の炉址4ヶ所、同土塙24基、同中期の土塙59基が検出されている。これらの遺構は、縄文式時代早期、中期それに平安時代に区分することができ、これらの立地条件も狭い範囲ではあるが、時期別に区分することができる。

まず、調査区東端中央の平坦部には、平安時代の第1号住居址と3基の縄文式時代早期の土塙、北東部平坦面には中期の土塙群と第4号住居址、東南部には早期土塙群、調査区中央部の北側緩斜面及び、南側緩斜面には早期の住居址群と土塙群が集中している。

早期の住居址は、それぞれが明確にプランを確認することができ、若干の時間差を除けば早期の集落址として捉えることができる。住居址の特徴は、隅丸の方形ないしは長方形であること、一辺が4m前後であること。柱穴は住居址外側のコーナーに位置する。炉址は、屋外炉であることである。本遺跡で検出された中では、第3号住居址と第5号住居址に代表される。また、住居址に伴う遺物も確実に把握されている。

早期の土塙は、やや形態にバラエティーはあるが、ほぼ円筒形で底部の平らなものが多い。大岡村鍋久保遺跡の土塙は、円筒状でさらに低部に穴があいているものが多数検出されており、落し穴として理解されているが、本遺跡の土塙は、底部に穴があいておらず、単純な形態である。本文中でも記述したが、第44号土塙からは、石皿と磨石が共に出土しており、生活用具のセットを明示させているものである。全般に土器の出土量が極めて多いことも特徴のひとつである。

早期の炉址は、合計4基検出されており、いづれも住居址に隣接して存在している。大小の比較的浅い土塹の中に石を入れ炉としているのは4基とも共通している。住居址と炉址とのつながりをつかむには絶好の資料といえる。

中期の住居址は、破壊により柱穴で想定したが、柱穴内からの遺物ないしは、中期土塹群にかこまれた地点に存在することなどから想定した。土塹は、59基検出され本文中で示したとおり興味ある特徴を提示している。

平安時代の住居址は、A遺跡で検出したものと同様、東向きの石組みカマドであり、10世紀末～11世紀初頭に比定されるものである。住居址内には、巨大な石があり、興味深い資料である。

B遺跡から出土した遺物の総数は約6000点程あり、そのうちの80%以上は早期の遺物で占めており、中期が19%、他は平安時代のものである。

早期の土器は、撲糸文系土器群、押圧文系土器群、押型文系土器群、絡条体圧痕文系土器群、貝殻沈線文系土器群、条痕文系土器群があり、このうち特に主体を成すものは、押型文系土器群と貝殻沈線文系土器群それに条痕文系土器群である。第2号、3号住居址においては、この三系列の土器が混在して出土しており、複雑な編年の中で理解される。これらの在り方は、長野県内のひとつの特徴ということができるが、遺構を単位として確認された例は少なく、多くは遺跡全体を単位として報告されている場合が多い。大岡村鍋久保遺跡では、土塹を中心とし、遺跡全体から出土した土器によって、押型文の一群、沈線文の一郡、突き刺し文の一群、絡条体圧痕文をもつ一群、無文土器の一群に分類されており、いわゆる東日本文化圏と西日本文化圏との接点として理解されている。本遺跡では確実に遺構単位（住居址、土塹）で把握することができる。但し分類は、時間的関係もあって今後にまわしたい。

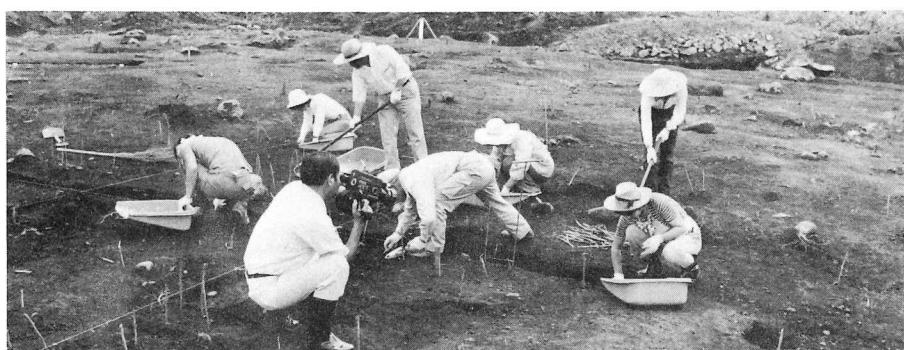
石器は、土器群と共に多数出土しており、いわゆるセットとして捉えることのできるものがほとんど出土しているといってよい。

前期の土器は、神ノ木式、関山式、黒浜式、諸磯A、B、C式、十三培台式の各型式がわずかに出土している。なかでも目立つのは、関山式と黒浜式である。

中期の土器は、ほとんどが梨久保式土器であり、僅に曾利式が加わっている。後期の土器も1点だけ出土している。

平安時代の遺物は、第1号住居址に限って出土している。

B遺跡は、各時代の遺構が集中しているところであり、中でも早期の住居址とそれに伴う遺物が検出されたことは大変興味深いことであり、遺物の編年の研究が中心であった早期の研究も、遺構を単位とした生活そのものの研究へと進展する貴重な発見がみられた。比較的空白部分の多かった中部高地のこの時期の研究に新たな資料を提供するとともに、重要な問題も投げかけていると思われる。 (以上福島邦男)



第19図 調査風景

## IX おわりに

新水A遺跡及びB遺跡の発堀調査は、予定より1ヶ月も遅れここに終了しました。遅れた原因は、当初予想もしていなかった密度の濃い発見が相次いだことと、調査方法において、A遺跡第1号焼失住居址とB遺跡の全体にわたってドットマップ方式を実施したことによります。数千点に及ぶ遺物をことごとく測量して図面を作成する作業は、当町初めての試みであり、大変な苦労がありました。時間的な都合によりその結果を本書に載せることができず残念に思いますし、やや片手落ちの報告書になってしまったことをおわび申し上げなければなりません。なお本書は、遺物整理等の都合により概報的な性格であることを付記しておきます。

本調査に際し、助言、指導をしてくださった顧問の森嶋稔先生、現場の中心となり、また毎夜整理作業を進めてくださった調査員諸氏、暑天下の中もくもくと作業をしてくださった作業員の皆さん、また、さまざま御協力くださった地元の皆さんに感謝の意を表するものであります。さらに、調査そのものに対し東信土地改良事務所、町建設係、町関係者の多大なる御協力をいただきました。調査団並びに町教育委員会事務局として御礼申し上げる次第です。

(調査団・事務局)



1. 新水A遺跡、B遺跡全景(左・A、右・B)(西側より)



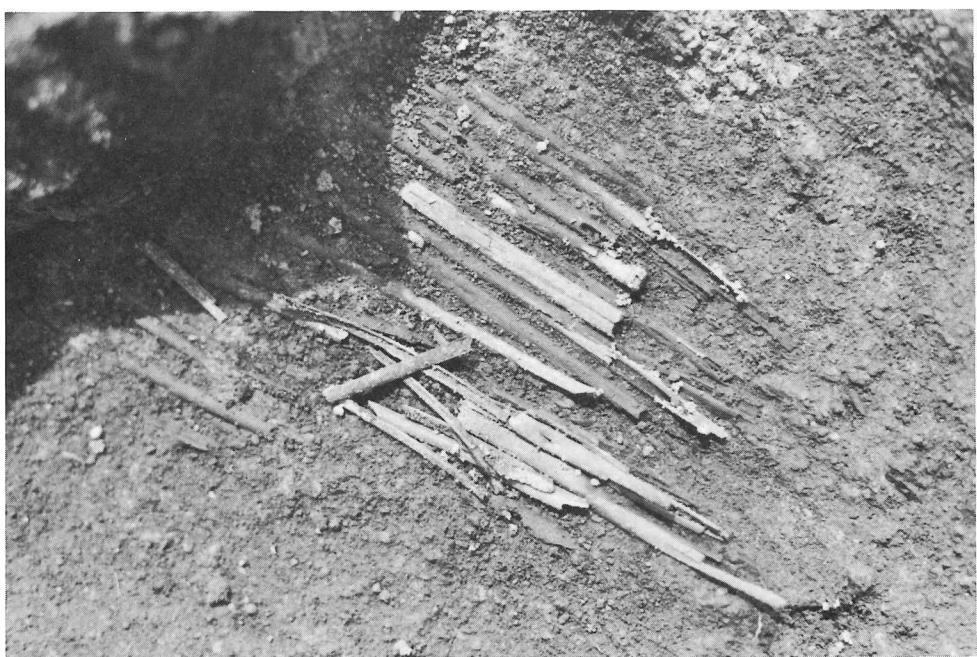
2. 新水A遺跡第1号住居址炭化物出土状態



3. 新水A遺跡第1号住居址平面プラン



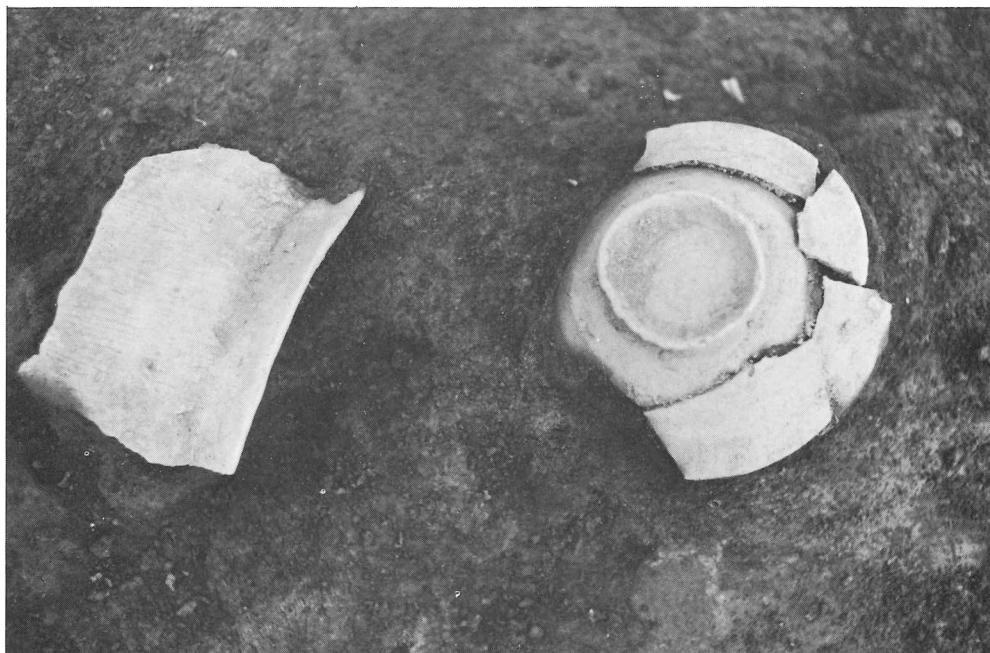
4. 新水A遺跡第1号住居址カマド復元状態



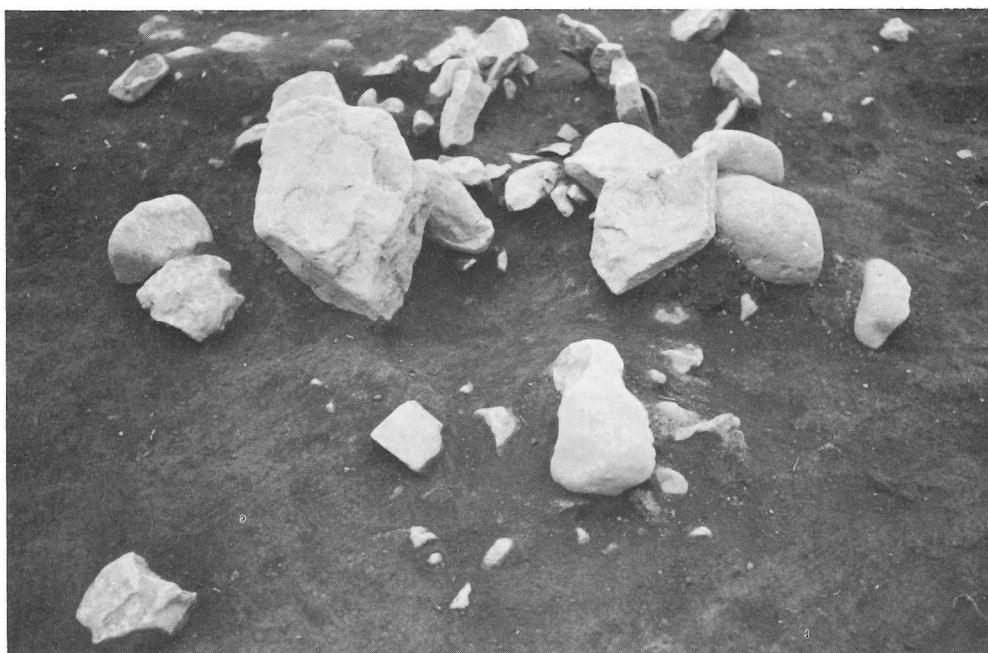
5. 新水A遺跡第1号住居址出土炭化物



6. 新水A遺跡第2・3号住居址平面プラン



7. 新水A遺跡第3号住居址遺物出土状態



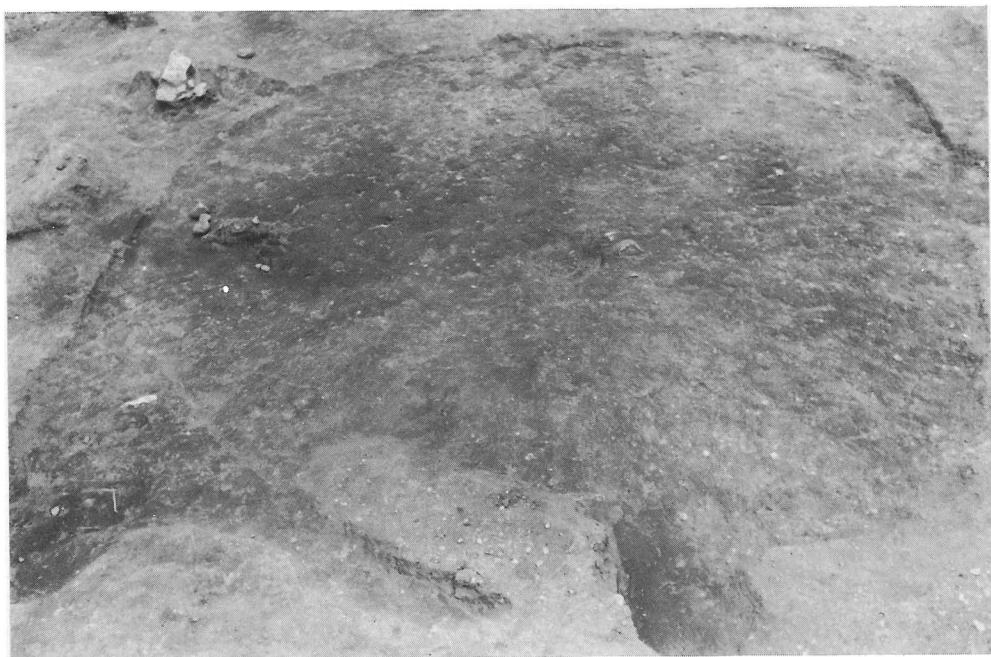
8. 新水A遺跡第4号住居址カマド



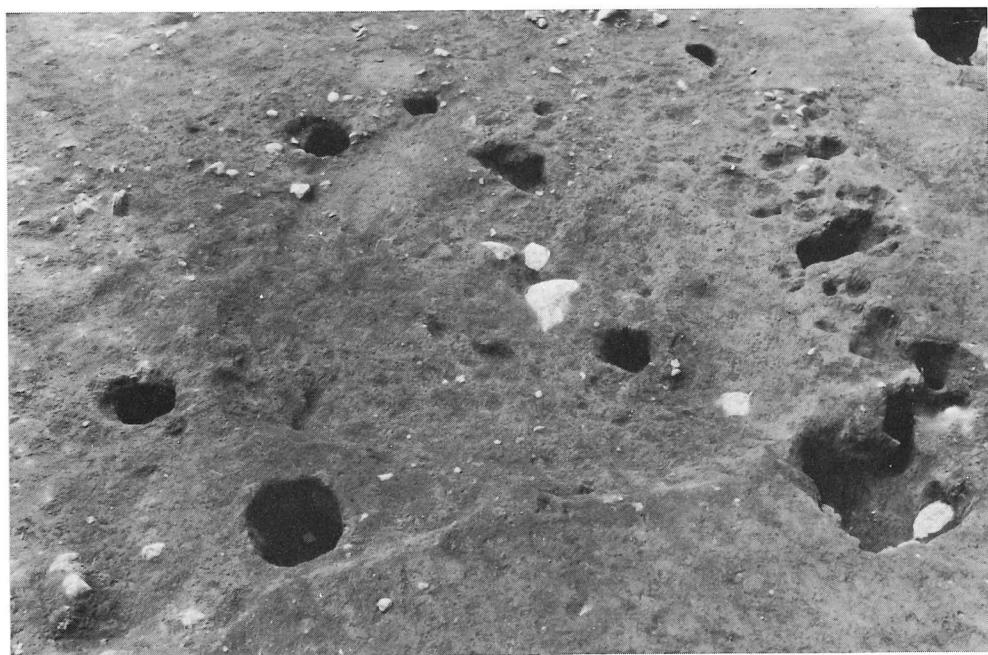
9. 新水B遺跡第1号住居址平面プラン



10. 新水B遺跡第3号住居址遺物出土状態（白荷札が出土地点）



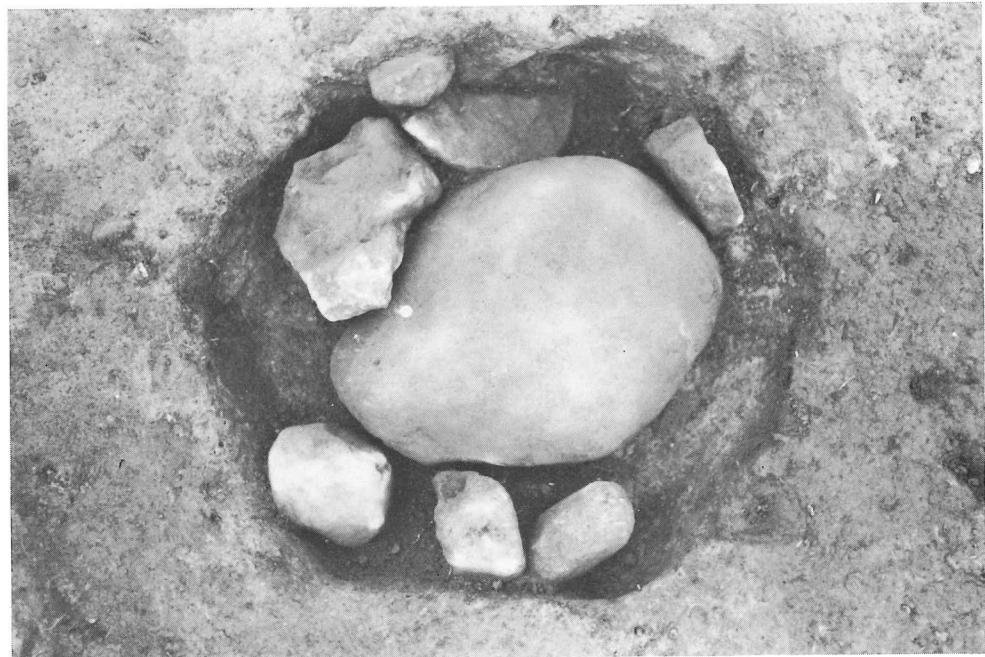
11. 新水B遺跡第3号住居址平面プラン



12. 新水B遺跡第5号住居址平面プラン



13. 新水B遺跡ロームマウンド



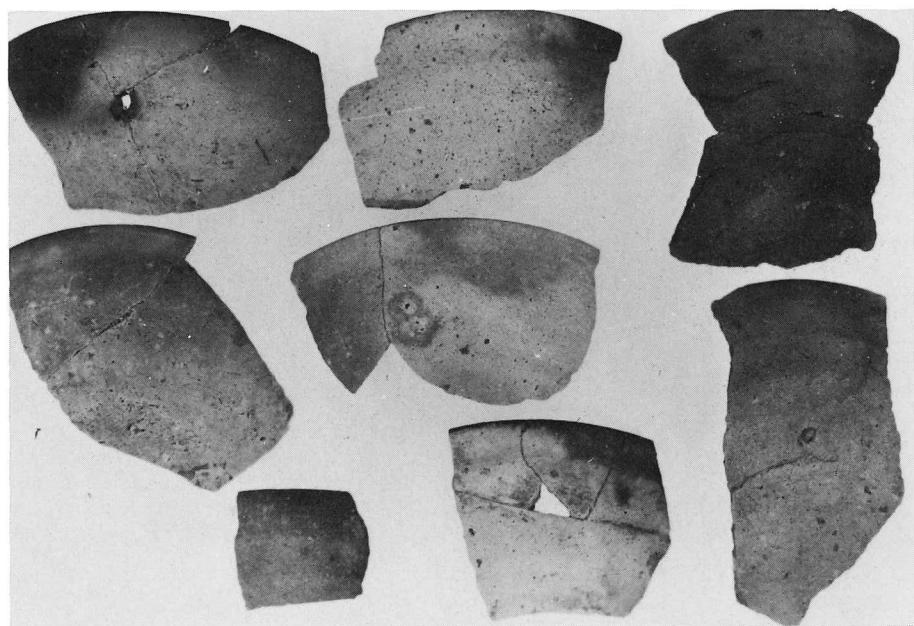
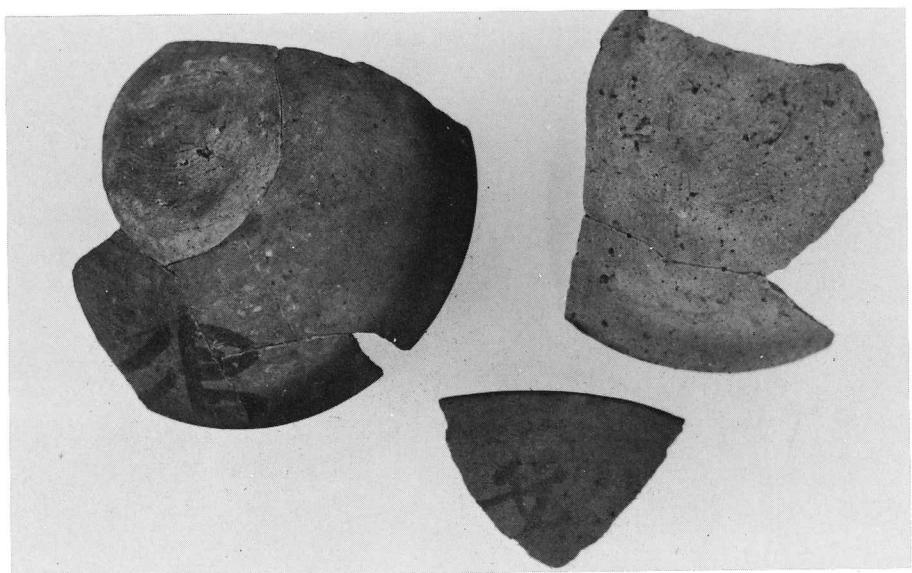
14. 新水B遺跡第1炉址



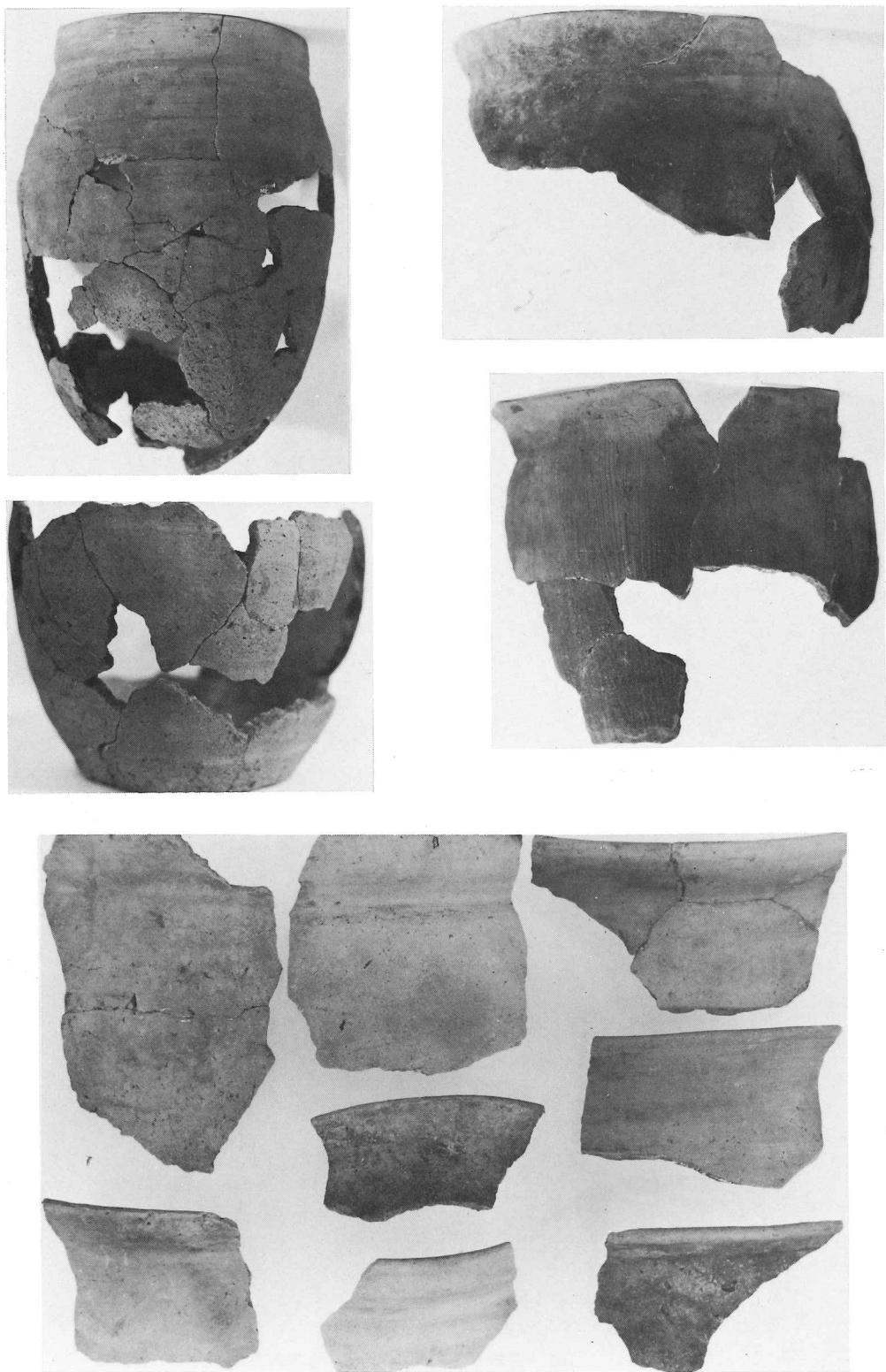
15. 新水B遺跡土坑群



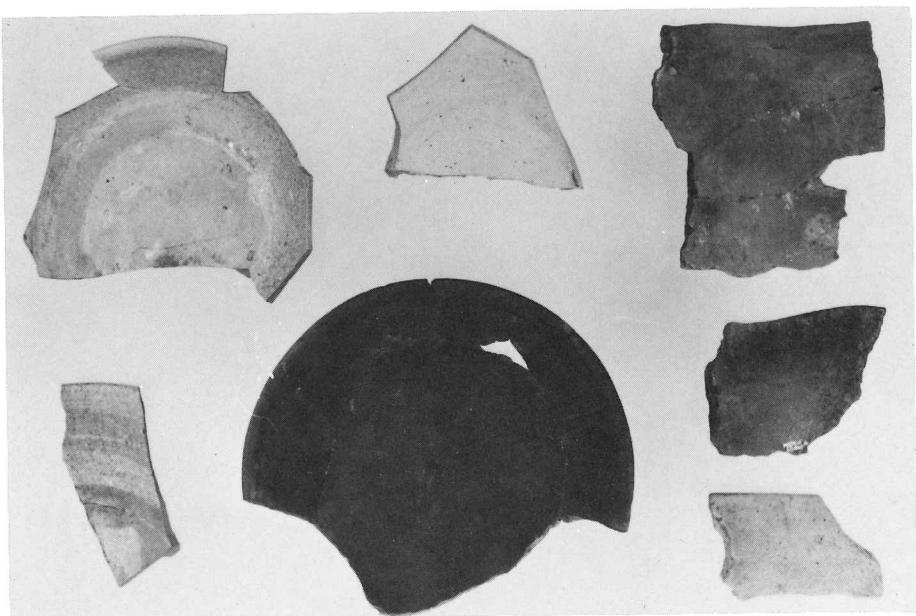
16. 新水B遺跡SK-10



17. 新水A遺跡第1号住居址出土土器



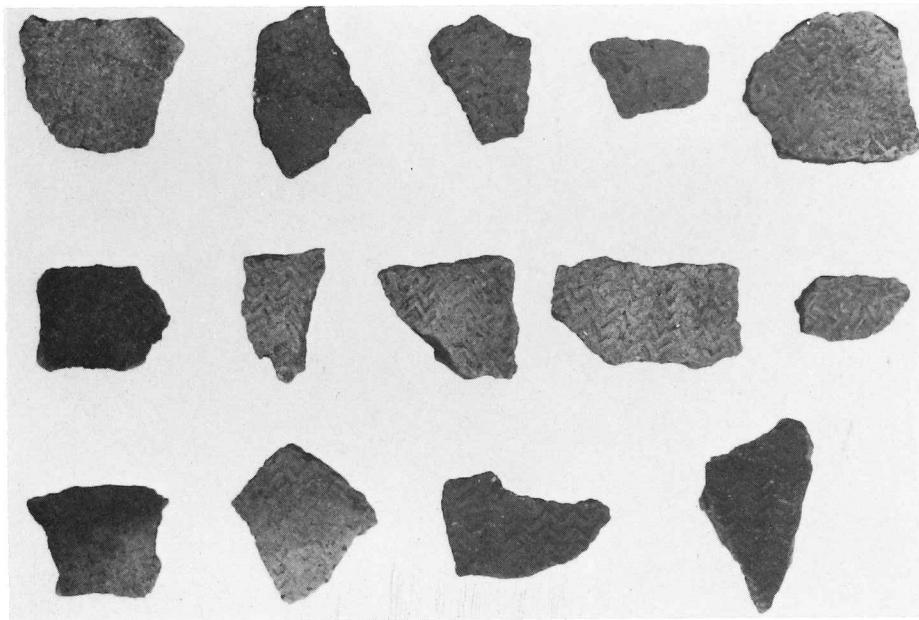
18. 新水 A 遺跡第 1 号住居址出土土器



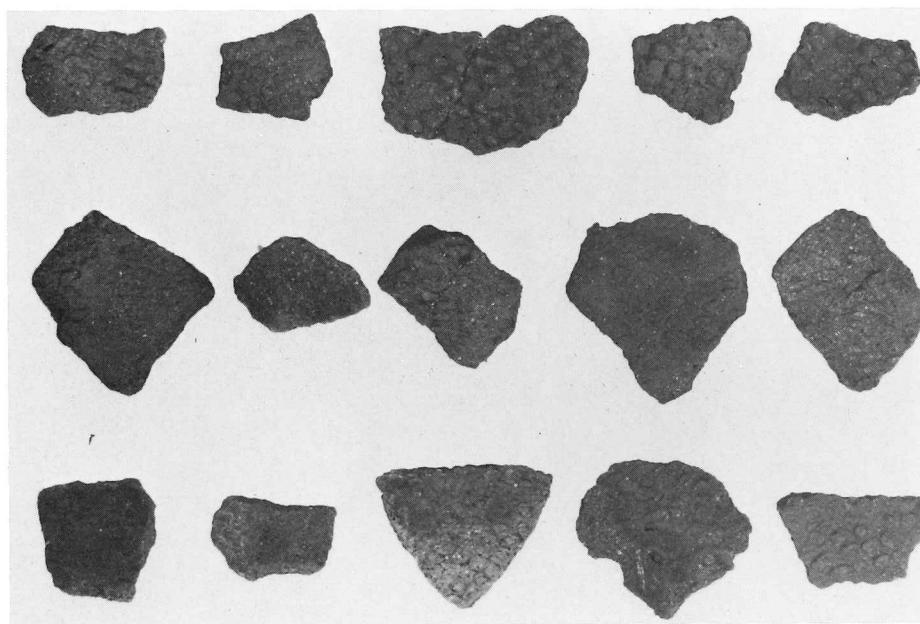
19. 新水A遺跡第2号住居址出土土器



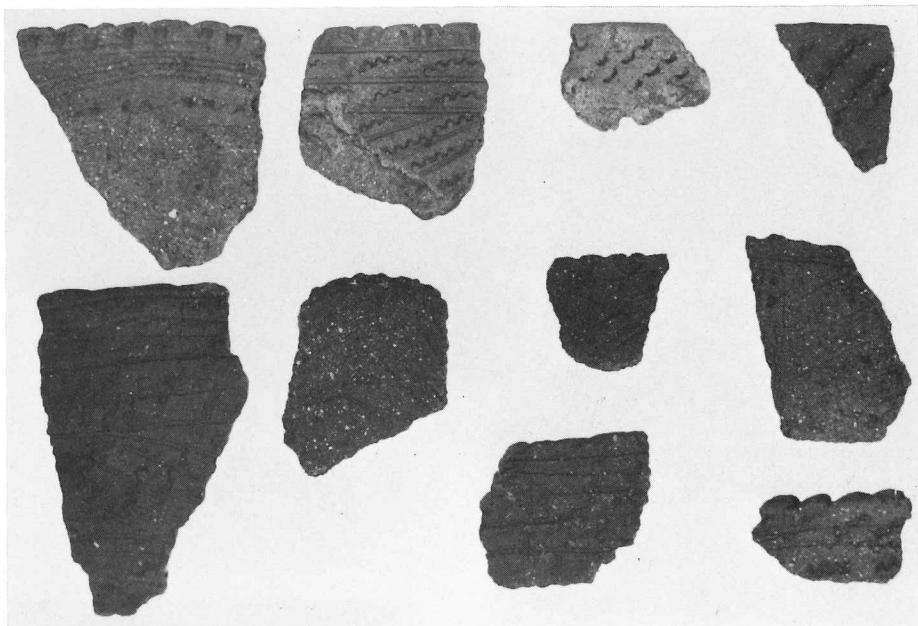
20. 新水A遺跡第2号住居址出土土器



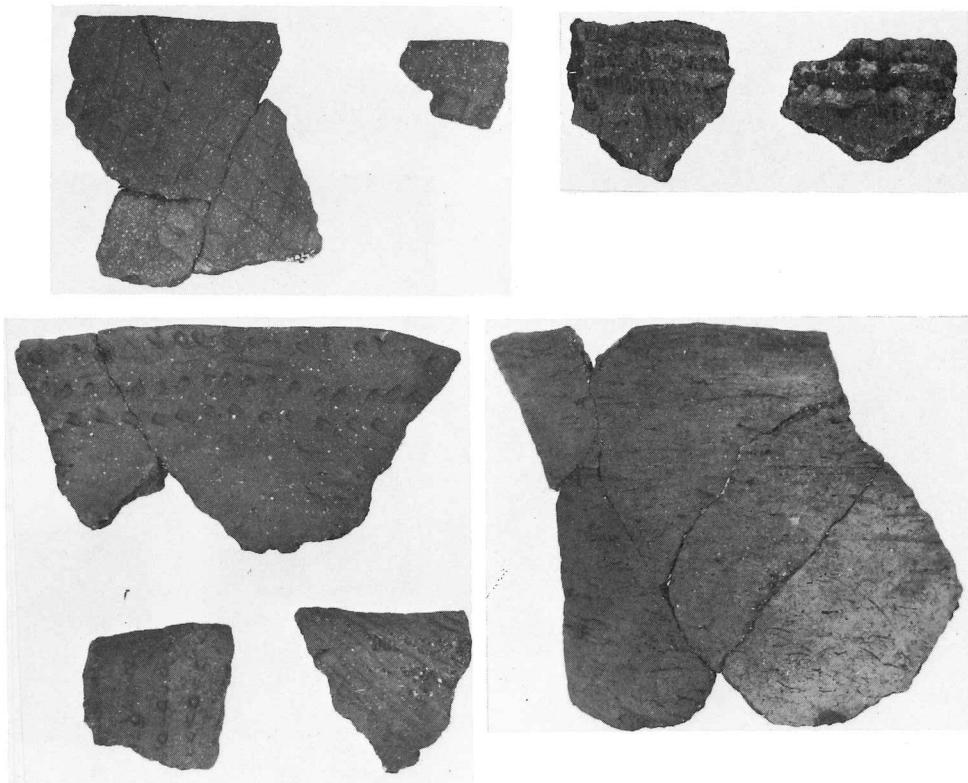
21. 新水B遺跡第3号住居址出土土器



22. 新水B遺跡第3号住居址出土土器



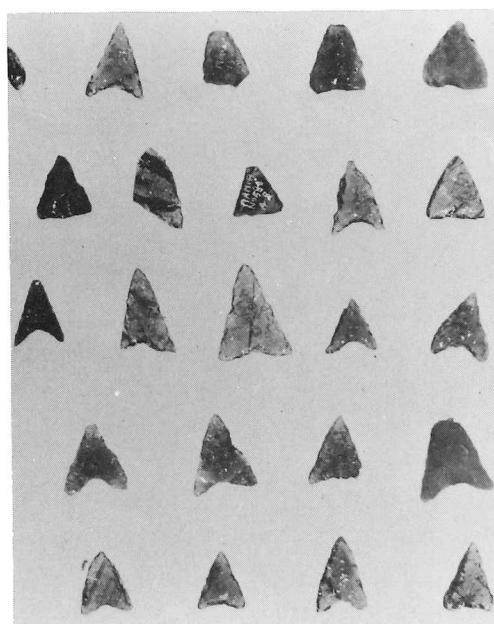
23. 新水B遺跡第3号住居址出土土器



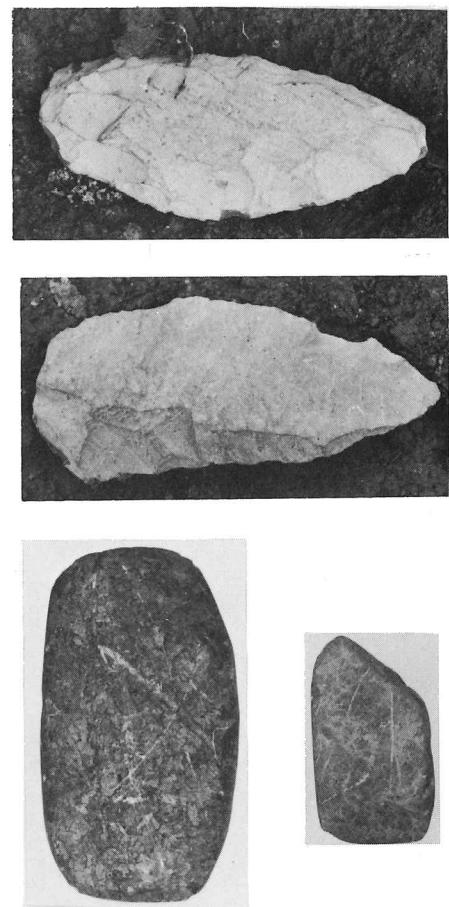
24. 新水B遺跡第3号住居址出土土器



25. 新水B遺跡土塙出土土器



26. 新水B遺跡出土石器





27. 新水B遺跡出土石器



28. 新水A・B遺跡発掘調査参加者

望月町文化財調査報告書 第7集

新 水

—長野県北佐久郡望月町  
新水A・B遺跡緊急発掘調査報告書—

発行 1981年3月20日

東信土地改良事務所

望月町教育委員会

印刷 長野市西和田 信毎書籍印刷